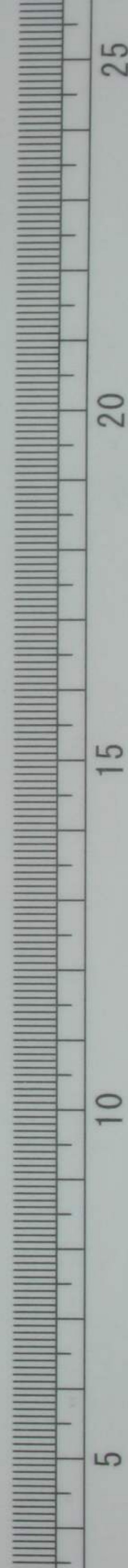


菽 之 家 歌 集



創 業 十 周 年 記 念 刊 行  
明 治 書 院

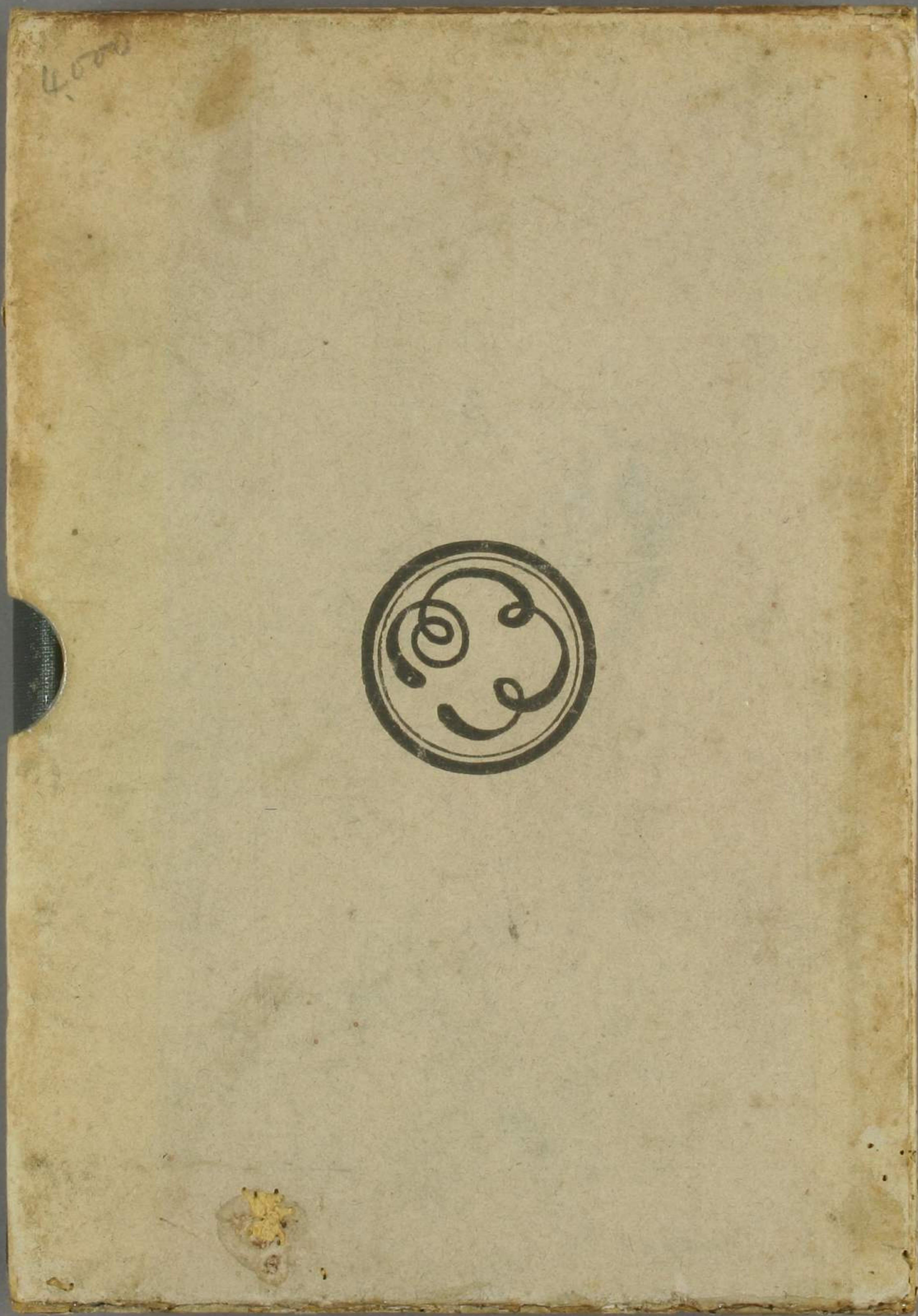




萩之家歌集

落合直文著

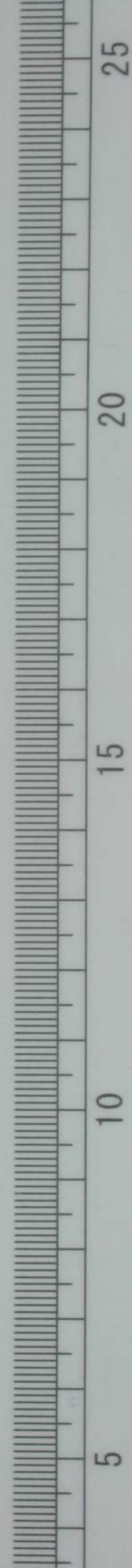
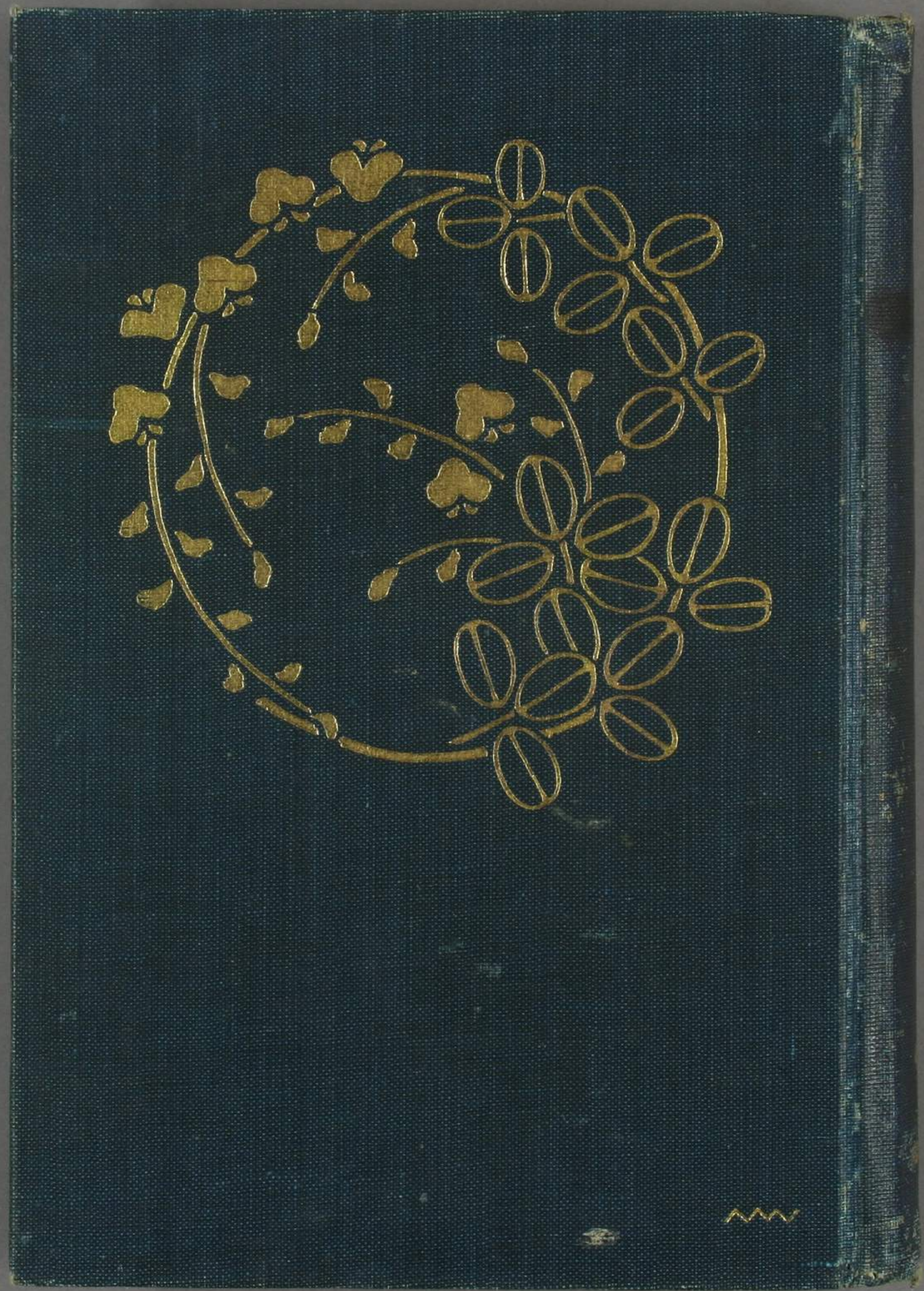
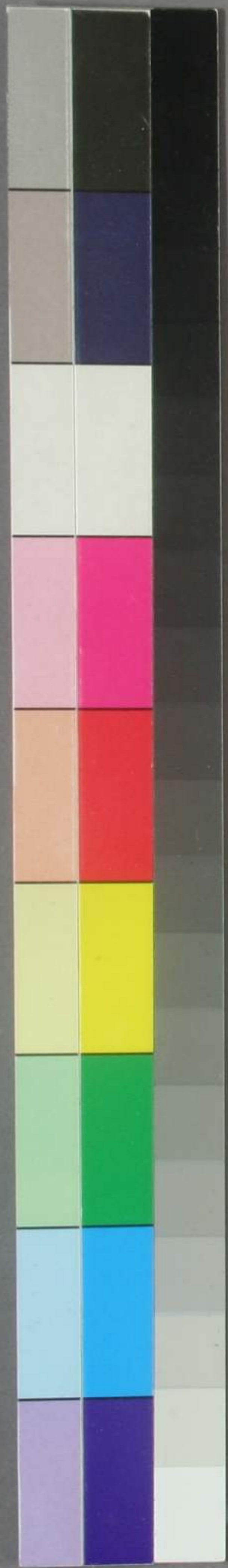




4000





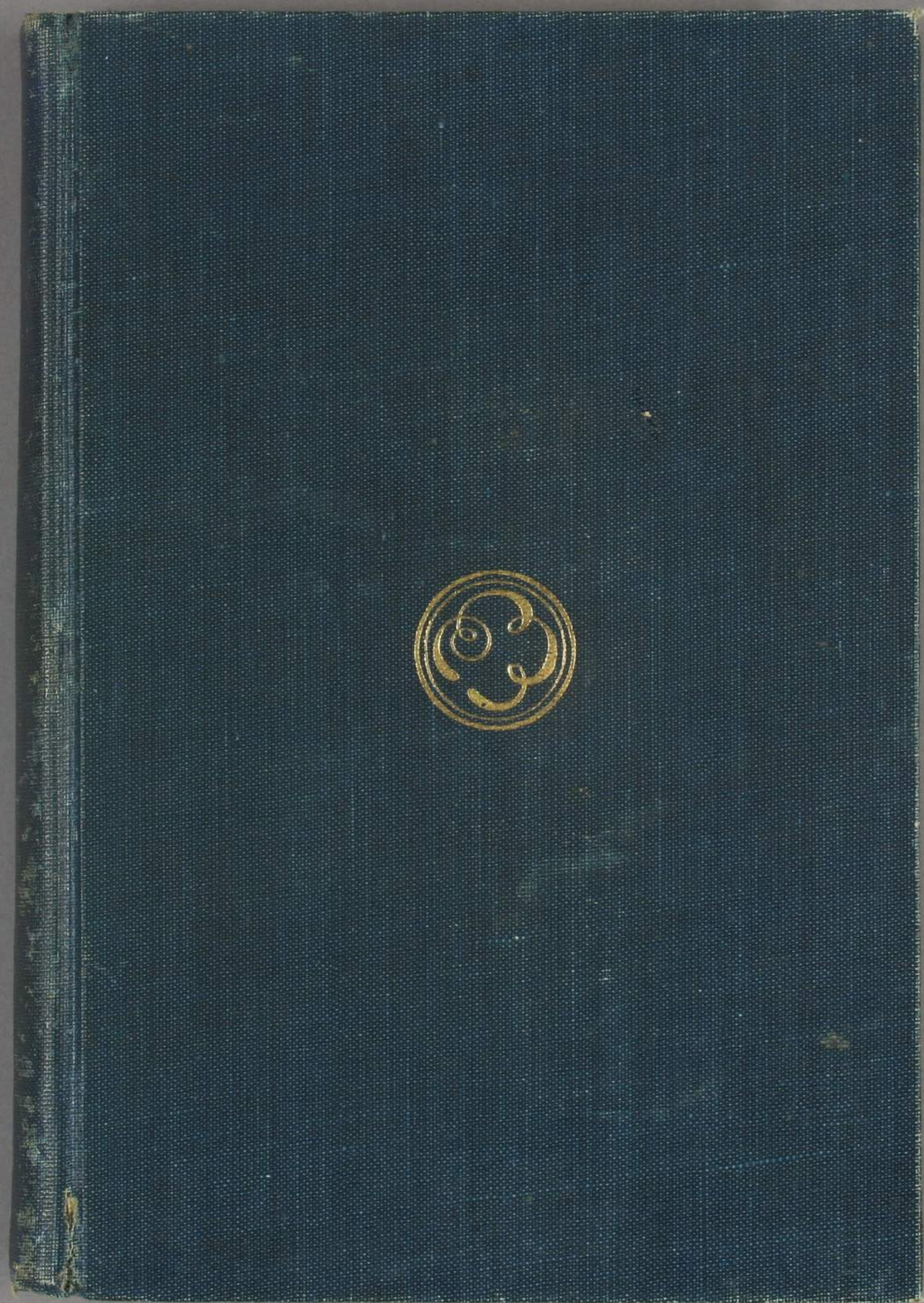




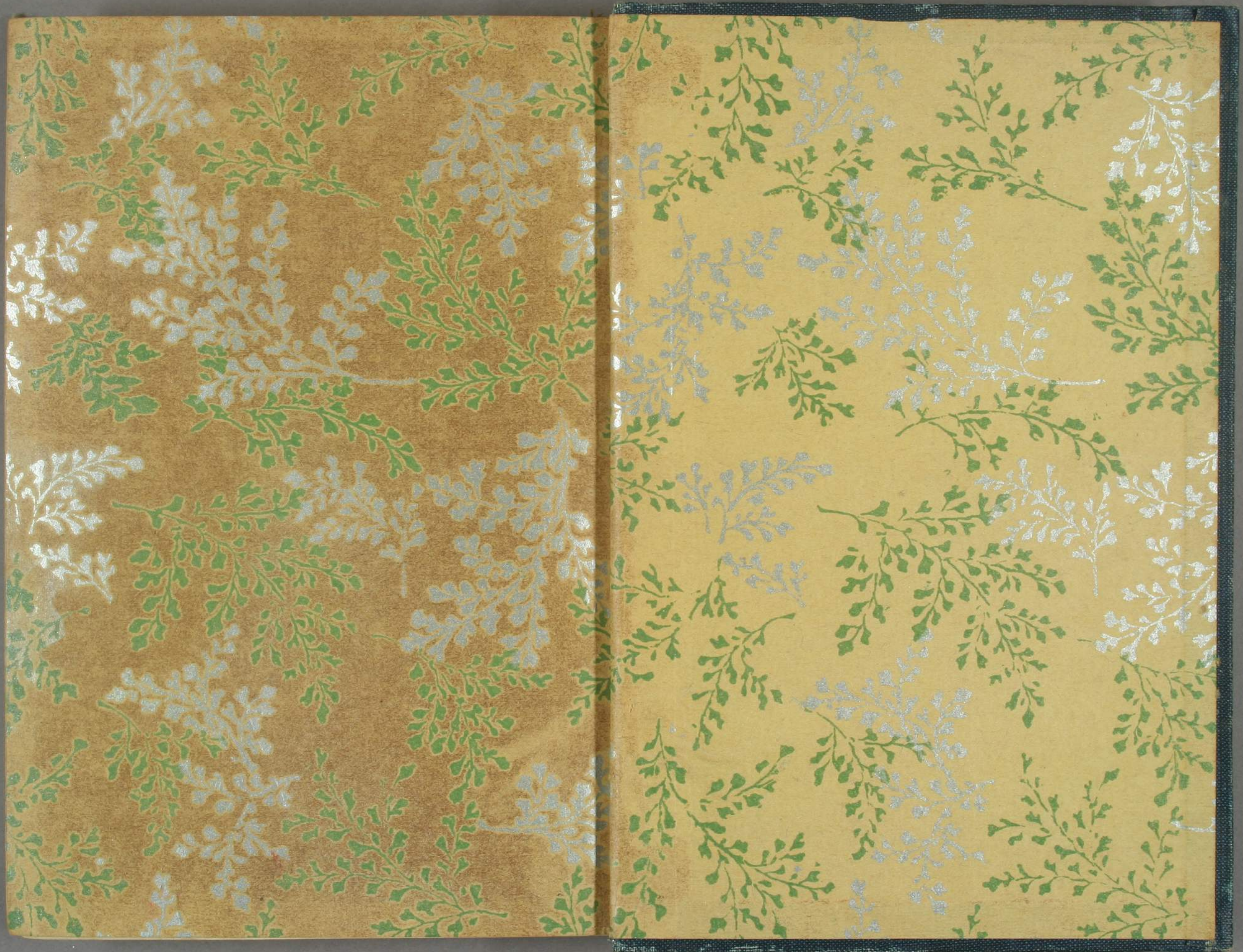
萩之家歌集





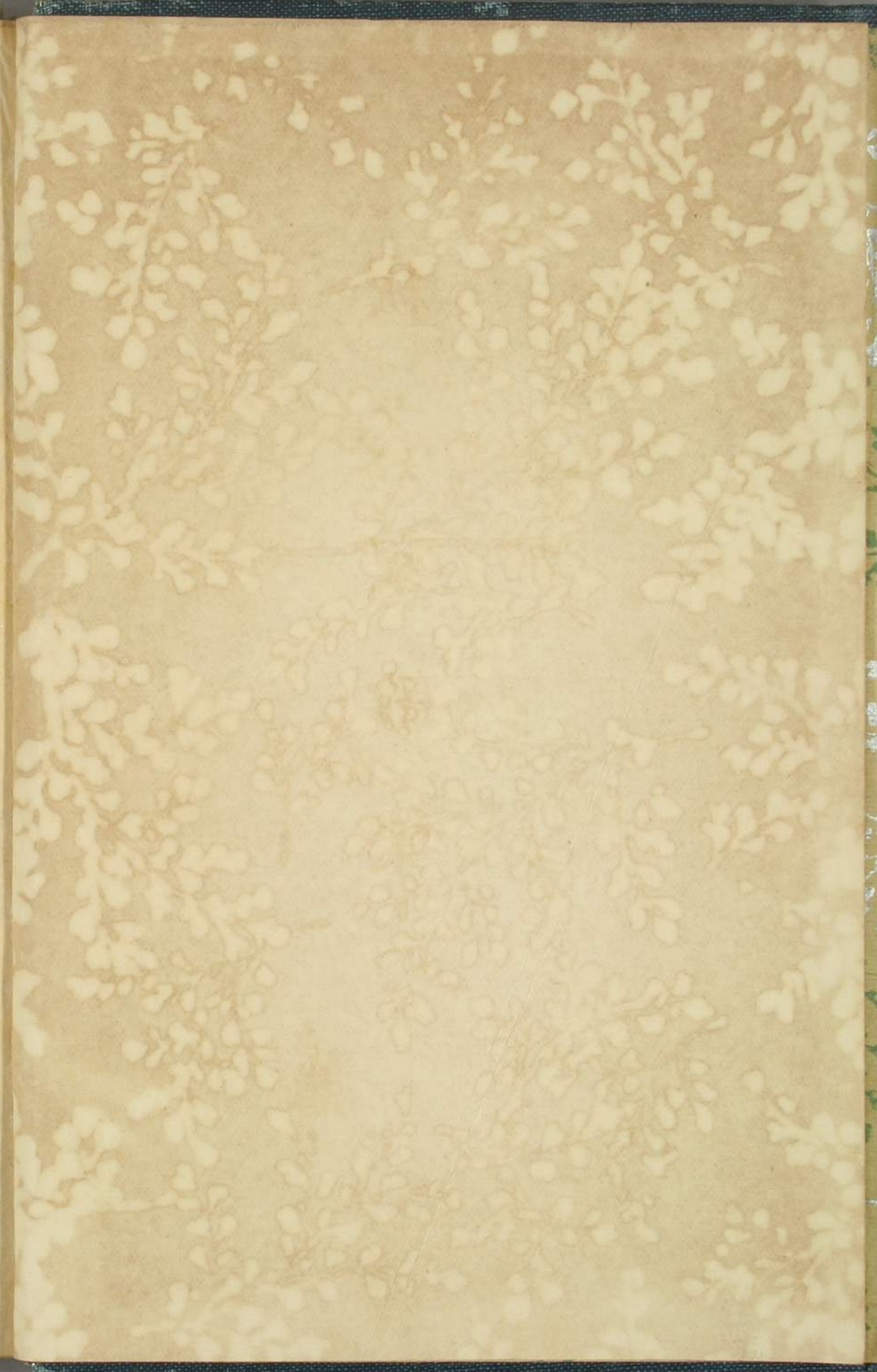








萩之家歌集





萩之家歌集











Handwritten Japanese text on a vertical slip of paper, likely a title or index page. The text is written in cursive (sōsho) and includes characters such as 山崎, 松平, and 徳川, suggesting a historical or genealogical context. The slip is pasted onto the left page of an open book.



Handwritten Japanese text in a vertical strip, likely a title or index. The text is written in cursive (sōsho) style and is arranged in two columns. The right column contains the characters 日本書紀 (Nihon Shoki) and the left column contains 卷之八 (Volume 8).



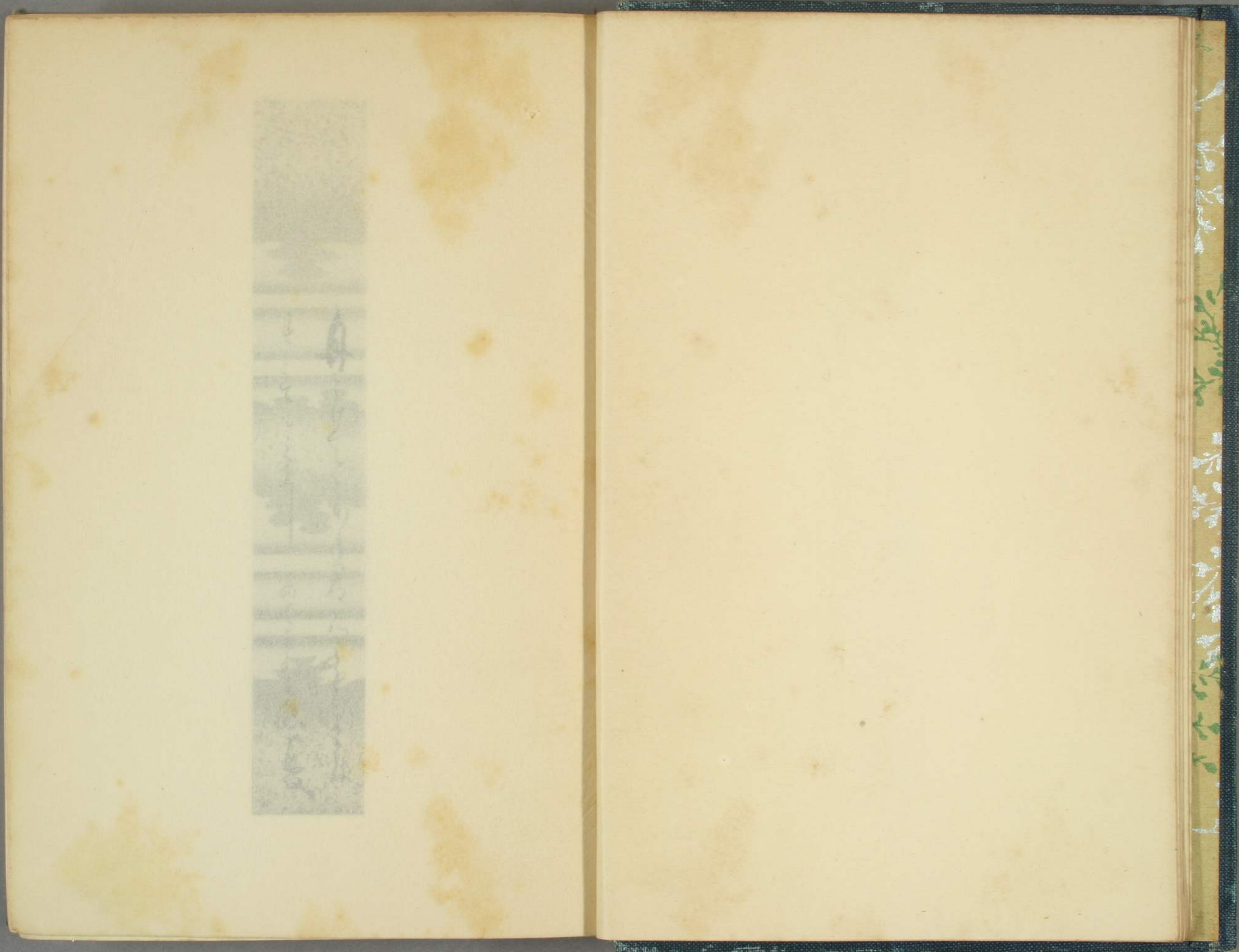




馬上  
杜鵑  
駒  
夏



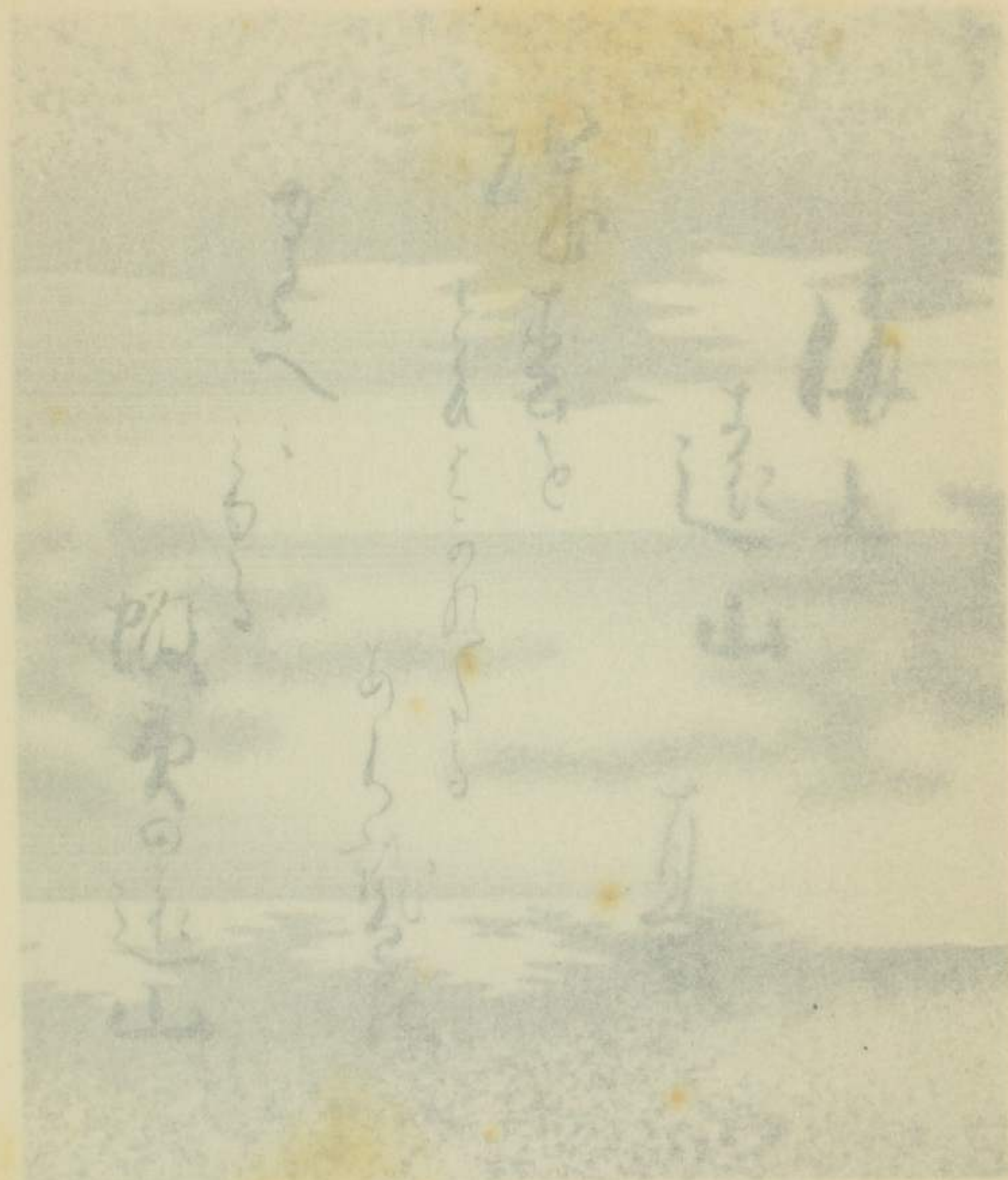




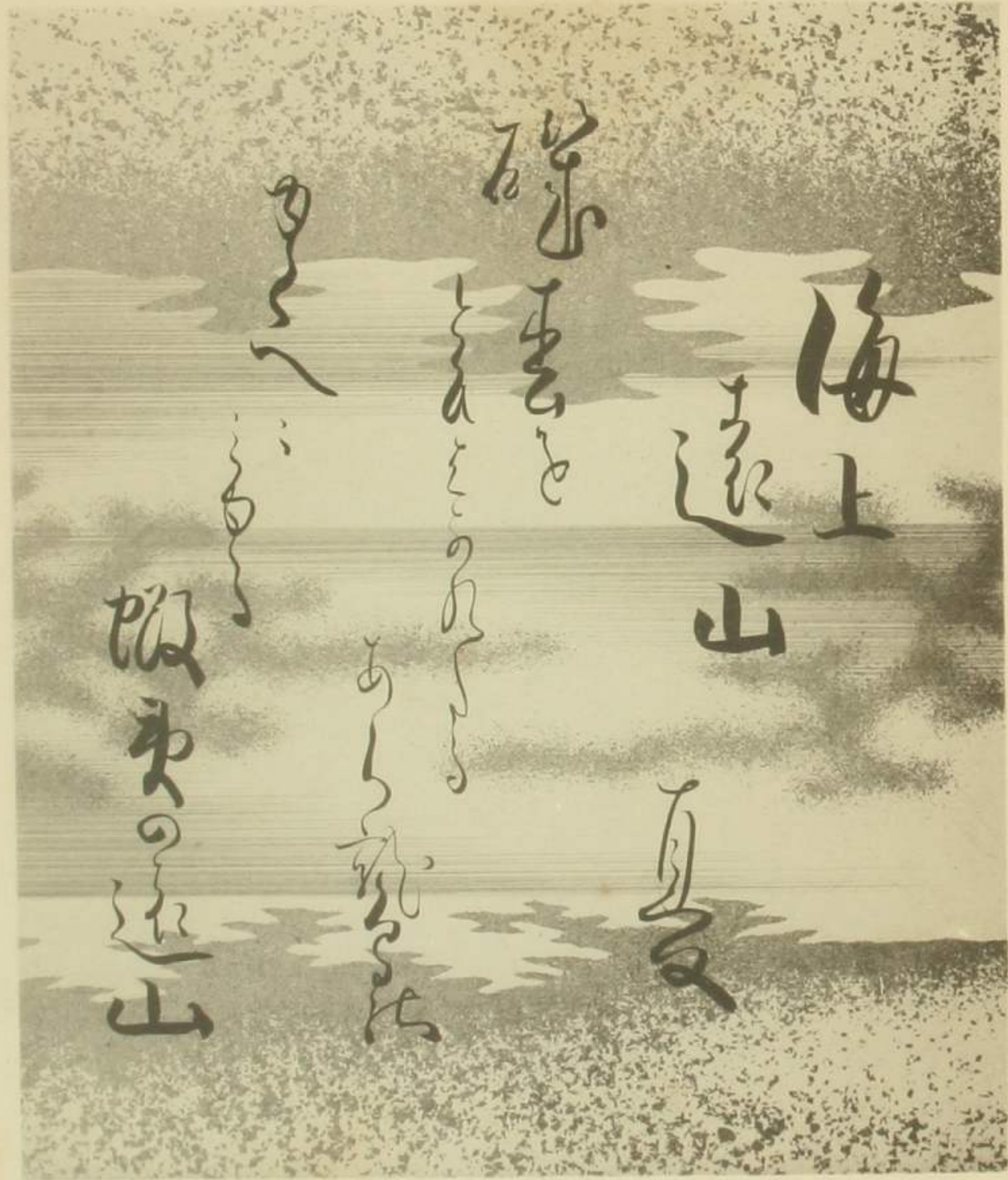












海上

遠山

夏

石

坂

山







The first part of the manuscript is a list of names and titles, written in a cursive hand. The text is arranged in several columns, with some lines starting with a large initial letter. The names appear to be of various ranks and titles, possibly from a court or a religious institution. The handwriting is somewhat faded and difficult to decipher in some places, but the overall structure is clear.

The second part of the manuscript is a list of names and titles, written in a cursive hand. The text is arranged in several columns, with some lines starting with a large initial letter. The names appear to be of various ranks and titles, possibly from a court or a religious institution. The handwriting is somewhat faded and difficult to decipher in some places, but the overall structure is clear.

The third part of the manuscript is a list of names and titles, written in a cursive hand. The text is arranged in several columns, with some lines starting with a large initial letter. The names appear to be of various ranks and titles, possibly from a court or a religious institution. The handwriting is somewhat faded and difficult to decipher in some places, but the overall structure is clear.

The fourth part of the manuscript is a list of names and titles, written in a cursive hand. The text is arranged in several columns, with some lines starting with a large initial letter. The names appear to be of various ranks and titles, possibly from a court or a religious institution. The handwriting is somewhat faded and difficult to decipher in some places, but the overall structure is clear.

The fifth part of the manuscript is a list of names and titles, written in a cursive hand. The text is arranged in several columns, with some lines starting with a large initial letter. The names appear to be of various ranks and titles, possibly from a court or a religious institution. The handwriting is somewhat faded and difficult to decipher in some places, but the overall structure is clear.



# 萩之家歌集

落合直文著

明治十四年秋、もの學ひせし伊勢を出てたちて、  
都にのぼりける折の村雨日記の中より、

今よりは隅田川原の月を見て神路の山の秋を

志のばむ (大神宮に詣づる道にて)



朝夕に汲みし五十鈴の川水をいつかへりきて  
またむすぶらむ(同)

君にまたあひの山てふ名のみこそわかれて後  
のたのみなりけれ(友にわかるとて)

里の名になほ残りけりいにしへのいつきの宮  
のあとは知らねど(齋宮驛にて)

二

都人とはばかたらむをとめ子がさすや櫛田の  
川のけしきを(櫛田橋にて)

三

三日月をけふ見そめけり望の夜の月はいづこ  
の里に眺めむ(松阪にやどりて)

汲み知らばふかきこころも見えぬべし山室山  
の谷の下水(山室山にて)



なかなかにめづらしとこそ見ますらめ山路の  
志めぢ谷の志ば栗(同)

春は花秋はもみぢのをりをりにながめ盡きせ  
ぬ山室の山(同)

いにしへを志のぶなみだの袖の上にいやふり  
まさる秋のむら雨(同)

もみぢ葉のほふあたりにわけ入らむ山室山  
はよしふかくとも(同)

袖ぬらすこのわかれ路のこころをば空にも知  
るや秋のむら雨(山室山にて人々にわかれける折)

いそがむと乗りは乗れども小車のはやきを今  
日はうらみこそすれ(かくて人々にわかれてより)



苔の下にいまもかなしと聴きまさむ音ものす  
ごき伊勢の浦波 (津なる結城宗廣朝臣の墓にて)

旅なれぬ志るしなるらむなにとなく衣手さむ  
し今朝の秋風

後はいさかかるけしきを見る時は旅を憂しと  
もおもはざりけり

六

おのが啼く時をも待たて秋の日を何に雲雀の  
こゑたてつらむ

七

おのづから神代の手ぶり見えにけり神樂つか  
ふる玉垣の里 (八垣神社にて)

來しかたにのこる煙を見てもなほすすろかな  
しきこの船路かな (四日市より船にのりて)



かくばかり身をもおもはで世をいのるころ  
熱田の神や知るらむ (熱田の宮に詣てて)

琴の音のうれしくもあるか家にありて聞きに  
し宵のここのみして (名古屋なる旅宿にて)

父母にきかせてしかな鈴蟲の鳴海の野邊の夕  
ぐれのこゑ (鳴海にて)

千年まできこえけるかな櫻田へ啼きてわたり  
しあしたづのこゑ

見もやらでよそにのみわれ過ぎてけり音きき  
山の音にききつつ

たづねくる人のなみだかまら露のおきそふ苔  
の下のいしぶみ (今川義元の墓にて)



かきみればむかしのあとも残りけり苔にうづ  
みし野邊の石ぶみ (同)

山がらす啼きて埒にかへるなり今宵いづらに  
われはやどらむ

旅人をやどれとまねく小薄のほのかにきこゆ  
夕ぐれの鐘

ふるさとを志のびこそやれ秋風に露もちりふ  
の里にやどりて (ちりふなる山吹屋にやどりて)

秋風にみだれはてけり色にいでし春やむかし  
の山吹のやど (同)

あはれなるものとはかねて知れれどもさらに  
露けき草まくらかな (同)



今日もまたよそに過ぎけり八橋やっばしの名のみばかりを聞きわたりつつ（岡崎に入りて）

家におへる鯉こいてふ名をばたのみにて君やめでたき瀬をのぼるらむ（赤阪なる鯉屋にて）

夕ぎりに見えわかねども松風の音するかたや湊なるらむ（新所より濱松にわたる汽船の中にて）

てる月のかげも乗るなりころあひのとも綱むすぶ舟のたよりに（曳船にのりて）

曳く人に舟をまかせてゐながらに堤づたひの蟲をきくかな（同）

こころあらば綱手ゆるめよ松蟲の啼ける堤に  
今かかりけり（同）



照る月のかげもさびしく見えにけり風ふきす  
さぶ濱松の里

もののふのむかしを今に志のぶらむ引馬の野  
邊にくつわ蟲なく

遠方<sup>をち</sup>にけふ見えそめぬふじの山ふもとのあた  
りいつか過ぐらむ

うまや路の並木の松をつたひきて袂にかかる  
秋のむら雨

松風の音ばかりだにさびしきを雨もふりきぬ  
小夜の中山

菊のさく山路にこよひやどりなむおく露のま  
に千代もへぬべく



うちむれてかへる樵夫まこりにこと問はむ明日も越  
ゆべき山はありやと

ゆふ風にひとつ落ちくる松かさの音さへさび  
し小夜の中山

寝もやらでわれは志のばむつれづれと雨さへ  
今宵ふるさとの空（金谷にやどりて）

いにしへのためしを今もきく川の深きこころ  
を汲みわたるかな（菊川にて）

朝霧にみぎはも見えず大井川舟よぶ人のこゑ  
ばかりして

袖ぬれぬ人に逢ひけりうつ山のふもとばかり  
や志ぐれしつらむ



いかにしてゆふべは越えむ晝もなほ木の下く  
らきうつ山道

たきぎこる賤が少女もうたふらむ山の奥にも  
道のある世と

波風のをさまる御代に生れあひてわたるもう  
れしうらやすの橋

海士の子は旅のあはれを知るやいかに清見が  
崎の秋の夕ぐれ (興津にやどりて)

おくれゐて聞きこそわぶれ都へといそぐ御空  
のはつ雁のこゑ (同)

さらぬだに寝られぬものを白波のよするおき  
つに何やどりけむ (同)



も志ほやく蟹かに少女子と身をかへて清見が崎に  
住まましものを（くら澤なる望嶽亭にて）

たちかへりまたもきて見む清見瀉たきよきなぎ  
さによする白波（同）

ふじ川やわたしの舟のいでぬまに乗りおくれ  
じといそぐ旅人

水鳥のむかしはいかに富士川や今なほさびし  
岸の秋かぜ

富士の嶺ねにはやまら雪はつもるらしやや袖さ  
むし田子の浦風

さ夜ふけてわれは見にきぬひさかたの月の御  
船の浮島が原



この里に住みても見ばや富士の嶺はのたかきを  
おのが心にはして (沼津を過ぐる時)

鐘の音のひびきは空に消えゆけどさびしさの  
こる秋の夕ぐれ

思ひきやうきことまげき旅寝にもかかるうれ  
しき宵のありとは (三島神社の宮司の許より歌會に招かれる夜)

おもふことかきながしやる水莖も身のうき草  
はさそはざりけり (この夜の兼題寄筆述懐といふことを)

筏士もこころやすくやくだすらむ月のひかり  
のさすにまかせて (當座は月前筏といふ題なりければ)

たく柴をよそにもとめてかへりけり軒端の山  
の紅葉せしより (ふは山家秋といふ題をえて)



夢だにもむすばざりけり旅ごろも裾野の原に  
風すさぶころ（宿にかへりて）

あはれともたれか三島の里にきてひとりつれ  
なくものおもふかな（同）

いひ知らずかなしくおもふ秋の夜にこころな  
く歌ふ人もありけり（同）

ふるさとにかはらざりけり箱根山あくるあし  
たの鈴蟲のこゑ（曉はやく宿をいでたちて）

たちつづく松の下道くからむきつね啼くな  
り山なかの里（山中の宿にて）

かし鳥の梢にあさる音さへもたまたま聞けば  
さびしかりけり



尾花おふる道ぞさびしきふく風に旅ゆく人も  
見えがくれして

たまくしげはこねの海をかがみにてすがたを  
よそふ富士の山姫

外國になしとは知れどありやともほこりて見  
むか富士の神山

あら雲に見えずもなりぬさきだちし人はいづ  
このあたり行くらむ

はこね山關はあとなくなりぬれどなみだゆる  
さぬ秋の夕ぐれ

みやしろはいづこなるらむ苔むしし鳥居は道  
にちかく見ゆれど (箱根権現を)



はしりゆく雲さへまげしはこね山ふもとのあ  
たり雨やふるらむ

腰かけむ岩がねもがなくなりかへしながめてゆ  
かむ瀧のまら絲

くさまくらむすばむかたも白雲のたちかくし  
たるこの山路かな

いかにしてわれは來にけむはこね山みねにた  
ちそふ白雲きくものあたり

見るままになぐさみぬべき海山も旅としおも  
へばかなしかりけり

ひとつだに家にもがなとおもふかな高嶺のい  
はほ谷の松が枝 (湯本なる福住にやどりて)



かぞふれば今宵ぞ秋の最中なかなるいく日へにけ  
むあづま路の旅(同)

秋の夜のふけゆくままに岩はしる水のひびき  
の空に澄みぬる(同)

さ夜ふかきこちこそすれはこね山あけての  
後の杉のむら立

たまくしげ二子の山やあけぬらむはこねの嶺  
の景色おもしろ

みねの松見えみ隠れみあけわたるはこねの山  
の霧のむらむら

里ちかくなりにつらしなはこね山杉の木の間  
にけぶりたつ見ゆ



うき雲ははこねの山にかかりけり今かまぐれ  
む小田原の里

荒れはてし大城おほきのあとをたづぬれば松の梢に  
風すさぶなり（小田原城のあとにて）

少女子がもてはやすてふまりこ川名もなつか  
しく聞きわたるかな

春ならば鶯のぬふ笠をだにかりて過ぎなむ梅

澤の里

（梅澤にかかるところ小雨ふりきければ）

鳴立ちしそのいにしへのあはれさのなごり身  
にまむ秋の夕ぐれ（鳴立澤にて）

ふるさとをたちいでしより旅衣なれてもさび  
し秋のゆふ風（藤澤にかかると道にて）



追分の尾花がくれの石ぶみも見えみ見えみ

秋風ぞふく（藤澤より鎌倉にかよふ道にて）

いづかたにふしどさだめむうちまねく尾花の  
袖のおほくもあるかな

いかにせむ道はまどひぬ日はくれぬ雨もふり  
きぬ風も吹ききぬ

聞くにだに袖はぬれけり村雨のふりよわりた

る鈴蟲のこゑ（八幡宮のもとなる旅宿にて）

とふ人のなみだなるらむ鎌倉の里さびしくも

秋雨ぞふる（同）

くりかへし遠きむかしを志のぶらむみだれて

見ゆる青柳の絲（若宮のほとりにて）



さだめなき世のありさまをはちす葉に知らせ  
てもふく秋の風かな (源平池にて)

おのづから落つるなみだにまぼりけり袖が浦  
回の秋の夕ぐれ (袖が浦にて)

千木の上になく神鳩のこゑさむし八幡の宮の  
秋の夕ぐれ (八幡宮に詣てて)

玉垂の小簾ふきあげし風なくば吉野の花は散  
らざらましを (鎌倉宮に捧ぐるとき、南朝の忠臣を歌へる中に、藤原師賢卿を)

笠置山松のまづくにぬれしよりつひにかわか  
ぬ君が袖かな (藤原藤房卿を)

ふく風を常陸の山にせきとめて君や吉野の花  
まもりけむ (准后親房卿を)



みちのくのあたらか木の花ざくら阿部野の  
風の何さそひけむ (北畠顯家卿を)

いかに染めしころ千ぐさの花ならむふく北  
風になびくともなき (千種忠顯卿を)

色香をばわか木の花にうつしおきておのれち  
りゆく櫻井の里 (楠正成朝臣を)

七たびといひし言葉は一すぢに君をおもふの  
きはみなりけり (楠正季朝臣を)

櫻井の里のなごりの色よ香よやがて吉野の花  
とさきにけり (楠正行朝臣を)

志ばしとて菊の下水にごりけむ汲み知る人に  
末はまかせて (楠正儀朝臣を)



はかなくも越路の雪と消えにけり吉野の春を  
おもふばかりに (新田義貞朝臣を)

もののふの名はながれけりあづさ弓矢口の波  
に身はまづみても (新田義興朝臣を)

さくら木にこころもふかく染めてけり吉野の  
宮の春を知らせて (兒島高德朝臣を)

うき雲を名和の浦風ふきはらひ船上山に月出  
でにけり (名和長年朝臣を)

伊勢の海にただよふ雁ぞあはれなる吉野の春  
の花も見ずして (結城宗廣朝臣を)

五月闇あやめもわかぬ筑紫路にひとり音をな  
く山ほととぎす (菊池武時朝臣を)



もろともに散らばちらむとみなと川菊のゆか  
りの香ぞながしける (菊池武吉朝臣を)

露霜のそのうきこともまらぬ火のこころづく  
しににほふ菊かな (菊池武光朝臣を)

かぐはしき名をば残して吹く風にちるも吉野  
の山ざくらかな (村上義光朝臣を)

うらさびて見るかげもなし賤の女が晩稻おしねかり  
ほす鎌倉のさと

大前に詣でばいかに道すがらはやぬれかかる  
旅ごろもかな (鎌倉宮に詣づる道にて)

今日ここにまぬびまをさむこともなし落つる  
涙をただきこしめせ (鎌倉宮にて)



御楯ともならましものをそのかみに生れぬ身  
こそくやしかりけれ (同)

そや野島こや平潟とたづねてむみるめを志ば  
しここにかりつつ (金澤八景一覽亭にて)

内川も乙艦も瀬戸も見てゆかむ洲崎のあたり  
浦づたひして (同)

月見つつ志のびてまさむ父母もわが子いづこ  
に今宵やどると (横須賀にやどりて)

とる筆もかぎりありけりかぎりなきこの嬉し  
さをいかに志るさむ (京に入りて、風箏をなるがみて)

たちわかれ明日はいなばの志る兎うさもつら  
さも神にまかせて (入營せむとする前日、人々へ)



むかし誰がよるひの袖にちりにけむ荒れにし  
城の山ざくら花 (古城落花)

明日またでちらむとすなる花の上に宿るもあ  
はれ春の夕露 (故三條公を去のびて、春露といふことを)

驚のなく千島の海のあらなみをふみさけ來ま  
せますらをの友 (岡本監輔氏の送別會に)

畝火山遠きむかしを去のびきてぬかづく袖に  
梅かをるなり (大和紀行の中に)

梅の花かをれる野べに寝たる夜は旅を憂しと  
もおもはざりけり (同)

このまとるかしこのうたげとこの月は大か  
た酔ひてくらすなりけり (年のはじめに)



小簾のうちにちりくる見ればなかなか花に  
なさけの風もありけり (落花入簾)

駒とめてかへりみすればほととぎす一こゑ啼  
きぬ妹が家のあたり (馬上杜鵑)

一つもて君をいははむ一つもて親をいははむ  
ふたもとある松 (門松)

緋絨のよろひをつけて太刀はきて見ばやとぞ  
おもふ山ざくら花 (櫻)

近江の海夕ぎりふかしかりがねのきこゆるか  
たや堅田なるらむ (湖上霧)

さく花をさやかに見むおぼる夜の月にのみ  
吹け春の山風 (月前花)



とぶ鷺のかげさへ見えてこのゆふべあらし吹  
きそふ木曾の山道（竊中嵐）

旅人のともしすてたる松の火の一つのこりて  
夜はあけにけり（旅にて）

夏もなほこゑぞきこゆる大井川千鳥が淵は風  
さむくして（水邊納涼）

わが袖にかよふもかしこ御輦（みくら）の過ぎゆくあと  
の春のはつ風（陸軍始の行幸ををるがみて）

父君の杖にやきらむ一もとをわれにはゆるせ  
庭のわか竹（庭竹）

おのづから梢はなるゝ桐の葉のけさ目に見え  
て秋は來にけり（立秋）



身につけしその世こひしくおもふかな太刀見  
るたびに太刀とる毎に(折にふれて)

松蟲もまつとはきけど鈴蟲もふりすてがたき

野邊の夕ぐれ(秋夕)

ゆく水にまばし流れてもえゆくは誰にうたれ  
し螢なるらむ(螢)

やみの夜にをりをりかをる梅が香のあやめも  
わかぬ戀もするかな(寄梅戀)

おひそめし小島が崎の姫松に千年をかけて波  
もよすらむ(小島氏の女の子生めるに名を浪子とつくとして)

月もすみ蟲も啼くなる秋の夜を長しとのみは  
おもはざりけり(秋夜長)



逢はでのみふるやの軒の繩すだれいつまでか  
かるわが身なるらむ (久不逢戀)

八千草はうつろひはててむさし野はみながら  
霜の花さきにけり (冬野)

いにしへの花のみやこにかへれとか老木も今  
はみづえさすらむ (舊都新樹)

うれしくも垣のこなたにさきにけり隣に植ゑ  
し朝がほの花 (隣朝顔)

花ちりてなごりもあらぬさくら田におもひわ  
びてか蛙なくらむ (暮春)

よみましし人ぞおはせぬ御机みつくえにのせたる書よみは  
そのままにして (亡叔直澄の追悼に寄書懷舊を題にて)



おもひあまり夢にも見しか御供<sup>か</sup>せしその世の  
春の花の下かげ (おなじく、春夢を題にて)

大とものみつのはま松かすむなり波とともに  
や春はたつらむ (早春海)

ひきはへしま<sup>り</sup>くめ繩のながかれと君が代よ  
ばふ春はきにけり (立春)

ゆたけさを御代にゆづりて宮人のころもの袖  
やせまきなるらむ (禮服)

さびしさは秋のならひとおもへども言へども  
さびし秋の夕ぐれ (秋夕)

やがてまた雨とやならむ賤が家の軒におりき  
ぬ峰の志ら雲 (山家雲)



國をおもふ心の色にくらべ見む春日かすがの森の朱あけ  
の玉垣（春日神社に詣てて）

家出にと縫ひしころもをぬぎかへばうすき心  
と妹やうらみむ（旅更衣）

逢ふ夜半はふすまの風もいとひしにいつ世に  
洩れしうき名なるらむ（顯戀）

ひとつ色に風ぞ吹きける秋たたば千草花さく  
庭の夏草（風前夏草）

唐ごろも袂しあらば人なみに志ぼらむものを  
秋の夕暮（洋服をつけて歌會に臨みしに、秋夕といふ題をえければ）

波の音も今朝はのどかに二見がたあくるかた  
より春風のふく（春風來海上）



うづみ火をはなれぬものは吾妹子が手飼の猫  
とわれとなりけり(冬歌)

清水汲むかよひ路のみをのこしおきて志げり  
はてたる庭の夏草(閑庭夏草)

うぐひすのはつ音を花にうつしなばいかなる  
色の香ににほふらむ(鶯)

琴の音はかよふものから何にかく逢ふことか  
たきわが身なるらむ(近不逢戀)

潮沫なまの凝りし國べはいかならむ浪風きよしう  
らやすの國(四海清)

ふたつなきものなりながら事しあれば千々に  
くだくるわが心かな(折にふれて)



雪の色に似たる扇を手にとればならさぬほど  
も涼しかりけり(扇)

呼びにやりし友より呼びにおこせけり雨はい  
づこもさびしかるらむ(秋の雨ふる日)

母にとてわが書く文のふぶくるに入れてやら  
ばや加茂の川風(夏のころ西の京にて)

野分して荒れたる宿の園生には惜しきばかり  
の月のかげかな(野分のおとの月を觀て)

なるかみのひびきの灘の夕立に筈もふきあへ  
ぬ船やあるらむ(夕立)

大空もひとつみどりに見えにけりわか草もゆ  
る武藏野の原(野若草)



去めこそはひきはへたれど山里はおのづから  
なる門の門松 (山家元旦)

氷賣るこそもいつしか聞きたえて巷ぢまたのやなぎ  
秋風ぞ吹く (市立秋)

うちすててかへりみもせぬ笛すらもとりいで  
らるるこの月夜かな (仲秋月)

萩が枝えにおきにし露をこの秋はおのが袂の上  
に見るらむ (旅中、庭前の萩、悉く刈り盡されたりと聞きて)

雪のうた書かむとすればこのあした硯の水も  
こほりけるかな (朝水)

賤が家の軒の垂氷たろいの一まづく落つる音にも春  
を知るかな (立春)



をとめ子が扇の風やよわからしふたたたびたち  
て飛ぶ螢かな (美人撲螢)

春をただうかるる時とおもひしは花ちらぬま  
の心なりけり (花散春閑)

われのみと思ひしものをほととぎす隣の琴も  
かきたえにけり (杜鵑一聲)

めぐりきて今朝まぐるるや吾妹子が夢とひす  
てしなごりなるらむ (朝時雨)

山寺の鐘もきこえてすみぞめのたもと戀しき  
秋の夕ぐれ (山寺秋夕)

をさな子の死出の旅路やさむからむこころし  
てふれ今朝の白雪 (長女文子の身まかれる日)



小木曾山たかき梢の鷺の巢もあやふきばかり  
吹くあらしかな（霧中嵐）

枯れたりとおもひし門の古やなぎそれさへ春  
はもえいでにけり（春色）

月清みひとりこえきて二人まで友にあひけり

歌の中山（西の京にて）

ふるさとのわが松島にくらべ見む朝霧はれよ

天の橋立（丹後紀行の中に）

名もなしと里の翁はこたへけりあはれこの山  
はしきこの山（同）

知らずしてわれ宿りしに今朝見れば窓はむか

へり富士のまば山（静岡にて）



明治二十六年の末つかた第一高等學校の生徒、  
鎌倉にて、發火演習を行ひけるとき、從軍行とい  
ふを題にて、百首よみたる歌の中に、

霜走ろきいくさの場ばばに月さえてひきく過ぎゆ  
く雁の一つら

色あかきもみぢさへこそちりにけれ血汐なが  
るる鎧の袖に

汐と共にあだは退ひきけむ攻めくれど影だにも  
なし稻村が崎

はるばるとわがふるさとを去はのぶかな寒き霜  
夜に太刀枕して

敵ははや近くよすらしうつ筒のけぶりぞ見ゆ  
る松原がくれ



名にしおふ清水の底にうつりけりおのがかぶ  
との星月の影

敵の射る矢よりもまげくこの夕雨こそそそげ  
やぐらの上に

楯の上にうちやすらひて簫吹けば月ものほり  
ぬ山松のあたり

寝もやらで焚きあかすなるもののふの篝火  
ろし夜やふけぬらむ

いかにせむ弓弦は断えぬ矢は盡きぬつるぎも  
折れぬ馬も斃れぬ

わが方にさちなきことやあるならむ空ゆく星  
のおちてけるかな



影あをき月さへてりて屍まかばねのかさなる下にこほ  
ろぎの啼く

さ夜ふけていくさの場ばばにきて見ればほむらた  
ちのぼる屍まかばねの上

影きよみ地圖手にとりて見てあれば月をよこ  
ぎる雁のひとつら

このゆふべ風なまぐさし屍まかばねの上より上をふき  
て來つらむ

矢叫のこゑもきこえし城の上の松にかかれり  
弓張の月

楯のおもにをれて亂れて立つ征矢の鷹の羽志  
ろく霜おきにけり



ささげもつ錦の旗にかがやきて清くものほる  
朝日子のかげ

駒にのりひとりしくれば負ふ征矢の羽音さむ  
けく秋風ぞふく

手むけする幣ぬきにまじりてまら旗の神の御前に  
ちる紅葉かな

もののふの背におふ母衣はちのほろほろと鳩ぞ啼  
くなる八幡やの宮に

もののふの鎧の袖の浦かぜに波の花ちる秋の  
夕ぐれ

よせくるは敵か味方かまら波の濱べを遠くと  
喊きのこゑする



朝比奈の阪には敵のかげもなし金澤さしては  
や落ちつらむ

わが乗れる駒のひづめも見えぬまでいくさの  
場ばにちる木の葉かな

ふるさとの妻こひしらに劔太刀とけては誰も  
寝られざるらむ

あしむらに敵か隠るる金澤やつらうちみだし  
雁のゆく見ゆ

このあした霜こそ白くおきにけれわが黒駒の  
立た髪かみの上に

もののふのともしすてたる篝火の煙けぶりのこりて  
夜は明けにけり



まくらべに今きこえしは松かぜか鼓の音かそ  
れかあらぬか

戈とりて眺めしをれば月かげのさやけき空に  
雁なきわたる

命あらばいきの松原ながらへてまたも見に來  
むいきの松原

駒の上をふく風さむくたつ髪に垂氷さがれり  
雪の下みち

血まみれし槍のほさきを洗はむと志ばしたち  
よる谷の下水

駒たててわれ見てあれば高嶺より紅葉ふきお  
ろす山おろしの風



たふれふす屍のかずも見ゆるまでさやかにて  
らす秋の夜の月

もののふのとりてはなちし銃つづの上にみだれて  
もちる玉あられかな

世の人にあかき心をめでられてうらやましく  
もちる紅葉かな

あだどものよせくと見しは夢にしてさむる枕  
にくつわ蟲なく

\*  
書よみ見ても袖ぞつゆけき笠置山松のまづくにぬ  
れしむかしは(披書思古)

秋をしもかなしき時といふめるはかかるわか  
れのあればなるらむ(秋哀傷)



天がける人のゆくへの見えぬかななげきの霧  
の空にたちつつ (同)

なかなかにうき人かげやおほからむ散りしぞ  
花のなさけなりける (花ちりて後、上野山にものして)

ながれ来る花こそなけれ小金井のさくらもこ  
こやとまりなるらむ (四月末つかた、小金井にものして)

いにしへの琴のまらべは知らねども今もきこ  
ゆる松風のこゑ (嵯峨野にて)

久かたの雲井のさくら知らずしてかへる人お  
ほしみ吉野の山

世をおもひねられぬままに劔太刀とりてこよ  
ひもながめけるかな



色も香も森のわか木にとどめおきてこころ志  
づけくちるさくらかな (森鷗外氏の父君のみまかられし折)

つくづくし手にもちながらねふる子は夢も春  
野になほあそぶらむ (春夢)

鈴蟲のこゑするかたに舟とめておもはぬ岸の  
萩を見しかな (水邊萩)

この秋は何を手むけの花にせむゆふべの雨に  
萩はちりたり (先師堀秀成翁の十年のみまつりに)

うごかずと名におふ石のほとけさへゆれても  
見ゆる那智の大瀧 (瀧)

てる月を松の葉ごしに見つつゆけば長くもあ  
らず天の橋立 (名所月)



世をいのる心のそこは石清水いはねど神はく  
みて知るらむ(勇山にて)

もののふのそそぐ涙にくらべなば志げくはあ  
らじ草の上の露(同)

たちわかれいなばの山のその名さへわすれて  
見たり今朝の白雪(人々と金華山の麓なる萬松館に雪見して)

ふるさとのここのみして眺めけりこがね花  
さく山の白雪(同)

わがおくる麻のさごろもぬぎすててはや身に  
まとへあやに錦に(大町桂月に)

とひくれど君はいまさずわがごとく君またわ  
れを月に訪ふらむ(月夜訪友)



わすれなむいまはたものは思はじと思ふも  
のをおもふなりけり(思)

われのみやものおもひをると出でて見れば尾  
花が袖も露けかりけり(秋思)

さをしかの啼きてや秋をおくりなむ刈りつく  
されつ萩が花妻(折にふれて)

笛にもとおもふ軒端のなよ竹にふしおもしろ  
きうぐひすのこゑ(鶯)

大君のかへりきまさむそれまでは初音もらす  
な山ほととぎす(明治二十八年初夏)

つねにきくこゑにはあれど秋といへばかなし  
かりけり峰の松風(松風)



わが門をたづねし人や誰ならむ歌こそ見ゆれ  
芭蕉葉の上に(ある時)

青柳の志づえよりちる志ら露をふたたび蓮の  
上に見るかな(蓮上露)

つかさをばみなりちすて朝な夕なみ枕のへ  
にこの身あらばや(逗子なる井上梧陰先生を訪ひて)

心あらばただ一ものよはひだに君にをゆづ  
れ庭の松原(同)

みをしへにそむける人をなげきます君が涙か  
苔の上のつゆ(松陰神社にて)

なき人の飼ひし家鳩啼く見てもほろほろ落つ  
るわが涙かな(鷗外氏のなき父君を志のびて)



照る月はおぼろなれども夜もなほ梅のかげ見  
る庭の池水 (梅映水)

さくら木のわか葉の露を見るときはちりにし  
花もおもはざりけり (新樹露)

よるづ代を春にちぎりし花にまた萬代ちぎる  
うぐひすのこゑ (大婚廿五年式の御祝に、鶯花契萬春といふ題を)

秋風に志をるるころは女郎花花にこころを露  
もおくらむ (草花露)

いづれとも梢はわかず志ら雪のふる川のべの  
二もとある杉 (杉上雪)

時雨にはなれぬる夜半の夢をさへおどろかし  
てもふる霰かな (夜露)



駒とめてこよひ聞きにしかりがねは妹があたりを啼きてきつらむ(馬上聞雁)

櫛の戸をたたくは誰そとうたがひもはるる月夜に水鶏なくなり(水鶏)

うまやぢの夜半のあらしのはげしさをいつか都の人にかたらむ(旅宿夢)

とる筆のさきもこほりてこのあしたわが書く紙に聲のあるかな(冬聲)

いにしへもかかるなげきのありつやと問ひても見まし軒の橘(橘)

蟲の音のきこえぬ野べもなかりけり秋はいつこもさびしかるらむ(滿野蟲聲)



住む人の名は知らねども涼しさにとひても見  
ばや松たてる門 (旅にて)

秋まちてふたたびわれはたづね來<sup>ま</sup>むまだうら  
わかし庭の萩原 (同)

かりねするこよひの宿の近からば折りても行  
かむさ百合撫子 (同)

春は雉子秋はをじかのたづねきて寂しくもあ  
らず山の下庵 (山家)

なかなかに訪はれぬもこそうれしけれつもし  
しままの庭の白雪 (閑庭雪)

里の子にすみれの床はゆづりおきてひとり雲  
雀の空に啼くらむ (雲雀)



もみぢ葉はさそひつくして朝あらし松に志た  
しむ冬は來にけり (初冬嵐)

雨はれてふく風そよぐ伊豫すだれいよいよ月  
のおもしろきかな (雨後月)

旅衣すずしき見ればやつ橋やくも手に風もふ  
きわたるらむ (夏旅)

母君のここにしまさば聞きつともかたらむも  
のを初ほととぎす (初時鳥)

をちかたに笛の音すなりさ夜ふけて月にねら  
れぬ人やあるらむ (月前笛)

都出でて日をふるさにかへれどもまだ霽れ  
やらぬ五月雨のそら (故郷五月雨)



里人のをしへしあたりたづねきてまことに聞  
きぬうぐひすのこゑ（驚誘人）

逢はでのみ秋は暮れけりこの冬はわがたもと  
よりまぐれそむらむ（冬戀）

誰か来てわれよりさきになすみけむ松の木か  
げに扇すてたり（納涼）

軒に来て呼べばまぐるる山鳩のこゑもさむげ  
に秋ふけにけり（山家暮秋）

うき世をば思ひはなれて富士の嶺のたかねの  
雲に夢やむすばむ（小田原にて）

呼べど呼べど人は歸らず呼べど呼べど人は答  
へず田子の呼阪（興津なる友を訪ふに、近うみまかりしとききて）



去ら波のおともすすしき大磯にいそぎてかへ  
る人を待たまし（大磯の宿より、西の京なる藤園主人のもとへ）

をとめ子がまねくたもとをよそにして心たか  
くもとぶ螢かな（螢）

門よりも柳は高くなりけりさしていくらの  
春もへなく（門柳）

ゆく秋はまたもかへらむもみぢ葉はまたも染  
めなむあはれ君はや（久米幹文翁を悼みて）

わかれかねたゆたふ身をばよそにしてながれ  
もゆくか加茂の川水（加茂川にて、橋本光秋君に）

たちいでてかへりみすれば吾妹子が門の柳に  
うぐひすの啼く（柳鶯）



芭蕉葉にかきにし歌やきえぬらむこころして  
降れ夕立の雨 (夕立)

鶯もみぢ色にいでてもかかりけり荒れにし寺  
のあか棚の上に (廢寺暮秋)

庭にちる花にもこゑのきこゆなりいかに去つ  
けき夕なるらむ (春聲)

えみしらを見ては犬さへ吠えにけりまだ世に  
うときみやまべの里 (木曾の山中にて)

みちのくは歌まくらおほしうたよまぬ人をゆ  
るしそ白河の關 (福島教育會にて)

なき人のゆきにし西のそらよりや身に去む秋  
の風は吹くらむ (秋風)



五月雨は霽るとも見えぬふるさとの父のおく  
つき苔やむすらむ (梅雨のころ)

見てだにも志のびてましを春の夜はなど月か  
げのおぼろなるらむ (春夜懷舊)

須磨の浦や月待ちがてら立ち出でてうれしき  
友に逢ひにけるかな (須磨にて)

須磨の浦やむかしのままの關しあらば外つ國  
人はとほさざらまし (同)

もののふの駒うちいれしあととへばむなしく  
かへる須磨の浦波 (同)

笛ふかむもののふもなしすまの浦や月はむか  
しの月かげにして (同)



筆とりてうつさまほしくおもふかな繪島が崎  
の秋の夜の月 (同)

汝もまたありしその世を志のぶらむ小松がく  
れの鈴蟲のこゑ (同)

もしほやく煙はたえてすまの浦や波間にうか  
ぶ紀路のとほ山 (同)

そのむかしいかに悲しと見ましけむ須磨の宮  
居の秋の夜の月 (同)

摘みにきてうれしきものはあしたづのむれる  
る野べの若菜なりけり (野若菜)

家づとにもてきて植ゑし一もとの萩にもやど  
る秋のゆふ風 (秋風)



むつまじき妻とたのみし扇さへおもひすてた  
る夏の夜の月（夏月）

小簾のうちは笛より外のかげもなしたちいで  
て庭の花や見るらむ（晝贊）

いそのかみふる野のみ雪かきわけて摘めど若  
菜は若菜なりけり（野若菜）

衛士の焚く庭燎（たば）のけぶりかすみけり春やみ空  
をこえて來つらむ（禁中立春）

秋もなほ人は訪ひけりわがやどのさくらの紅  
葉いろあかくして（庭紅葉）

玉すだれゆらぐともなき春風のゆくへを見せ  
て舞ふ胡蝶かな（蝶舞春風）



母の背にむかしながめしわが身とは知るや知  
らずやふるさとの月（故郷月）

なく鹿のこゑぞかなしき山里のもみぢふみわ  
け秋やゆくらむ（山家暮秋）

拭はむと手にとる太刀のたちまちに身に志み  
わたる秋の初風（立秋）

朝月夜かすむ野守が垣根みちかげふみゆけば  
雉子きさすなくなり（野雉子）

から人のささげし鶴も今日はまたわが大君の  
千代よばふらむ（日清戦役の年の天長節に）

たから舟まくらに志きてえみし舟うち沈めた  
る夢を見しかな（おなじき戦役の中に、新年を迎へて）



彈丸にあたりたふれしは誰そふるさとの母の  
文をばふところにして（従軍行とふ題にて）

鞍はみなあけに染まりて主もなき駒ぞ嘶くな  
る山かげにして（同）

駒にのりあかつきはやくわれければ折れたる  
太刀に霜おきにけり（同）

山駕籠に今朝うちのりて箱根路やむかしのま  
まの旅をせしかな（箱根山にて）

手むけにと君が今朝折る萩の上に露の外なる  
露やおくらむ（三上参次氏の父君のみまかれるに）

わが家はわがふるさとにあらざればかへりて  
もなほ旅寝なりけり（異郷是故郷）



たふれたる松をそのまま橋にして賤はかよへ  
り谷のあなたに (山家橋)

ははそ葉を時雨のたたくこちして秋にまぎ  
るる蟬のこゑかな (蟬聲如雨)

都鳥いざこととはむ花を見て歌おもふ人はあ  
りやなしやと (花のころ人々と舟を墨田川に泛べて)

木曾の山わがこえ來れば水無月に裕をぬがぬ  
里もありけり (深山夏)

賤が家の門のはひりに櫛の實のひとつこぼれ  
て冬は來にけり (山家初冬)

わすれゆきし扇のぬしを呼びとめて涼しさか  
たる松の下かげ (納涼)



おちそめし桐の一葉のひまなくば見えやあらむ  
三日月の影（初秋月）

漕ぎのぼる衣手すすしすみ田川舟には秋の風も乗るらむ（舟中納涼）

君をおもふ涙とも知れかきくらし日をふらん  
すの雨のゆふべは（池邊吉太郎氏の送別會に）

七ゆきし少女が伴を志のぶらむ高佐士の野の  
春のわか草（紀元節の日、野若草といふことを）

かきならず琴の志らべは知らねども吾妻とき  
けばうれしかりけり（寄琴戀）

さをしかも三笠の山を眺めけりわが待つ月は  
今か出づらむ（並鶯）



須磨明石月もさくらもこのごろは君がかへり  
を待ちわたるらむ (人の播磨に行くを送りて)

さく花はあとなくちりてうぐひすのみささぎ  
寒く春雨ぞふる (陵上春雨)

杉むらをわたるあらしのこゑたえておぼる月  
夜に狐なくなり (春獸)

道塚の松にかかりて立つ虹のきゆる末より降  
る時雨かな (行路時雨)

櫨紅葉うすく染めいでてきのふけふ時雨がち  
にもなりにけるかな (初冬)

花うゑし君まさずとは知らずして今年も雁の  
とくかへるらむ (山本敏氏の、擇提島にて病死したりきと聞きて)



うつしうゑし人を去のびて鳥がくれいかに露  
けき花のさくらむ(同)

うづらなく秋のあはれも今はなし霞こめたる  
ふか草の里(里霞)

みちぬれば缺くるものとは知らざらむおもへ  
ばあはれ望月のかげ(詠史)

ふみわけし君がこころにくらぶればふかくけ  
あらし小野のまら雪(同)

戈とりてうたひし人のおもかげもさやかに見  
ゆる秋の夜の月(同)

神路山ふもとの里にすみしより待たでも聞き  
つ山ほととぎす(神路山のふもとにて)



五十鈴川きよき川瀬にありたちし心をつねの  
こころともがな (五十鈴川にて)

老松のかげに小松のある見れば御代は千代と  
もかぎらざりけり (寄松祝)

あるが中にやや小だかきは去年の今日ひきの  
こしたる小松なるらむ (子日)

をさな子が手もとどくべく見ゆるかなあまり  
に藤のふさながくして

ゐながらも聞ゆるものをほととぎすこゑする  
方にたち出でにけり

池水をすずしき風やわたるらむ浮藻はなれて  
螢飛ぶなり (池上螢)



朝夕に手をばはなたぬ筆すてて太刀をとるべ  
き時は來にけり（日清戦役のころ、豫備軍の召集をうけて）

花を見る人かげおほみ上野山たかき梢にうぐ  
ひすの啼く

ゆく水はあとなく涸れてみなと川ながるるも  
のは涙なりけり（淡川にて）

手にもてるやまとをのこの弓矢をば知らでも  
空に鷺のとぶらむ（日清戦役のころ）

待たであらむ待たてをあらむ啼くときは待た  
でも啼かむ山ほととぎす（杜鵑）

小松原松原つづきゆけどゆけどゆけども盡き  
ずあはれ松原（旅にて）



水上のかすみのそこや雨ならむ簑きてくだす

宇治の川舟 (名所春雨)

霜おけどおくとも見えずわが宿の庭のまがき

の白菊の花 (雛菊)

いろいろに蟲のなく音はきこゆれど秋のあは

れはかはらざるらむ (秋思)

み越路の夏を去らねの山もとは今こそ萌ゆれ

谷のさわらび (深山蕨)

たちいそぎ衣とりいるるかたへよりやがて霽

れゆく夕立の雨 (夕立)

ゆく水に月を系がけるつま扇手にはとらねど

すずしかりけり (涼しきもの)



おきいでて月見る人もあるものを庭のねぶの  
木などねぶるらむ

ときどきに色はかはりて世の人の心に似たり  
あぢさゐの花

朝ごとに君がうちむかふ鏡には老いせぬ千代  
のかげも見ゆらむ (千家尊福氏の母君の賀に)

阿伽井くむわが衣手にやどりけり片山寺の秋  
の夜の月 (山寺月)

萩といふあいぬことばをおこせたる友のかた  
より雁は來つらむ (初雁)

たきもののけぶりもたえて塚の上にあふる雨寒  
くちるさくらかな (彰義隊の墓にて)



ちる花を惜む歌をば志るしたる紙をもさそふ

庭の春風 (春風)

大君のめぐみの波にかかりけり八十路の老の

末の松山 (さる翁の養老金を賜はりたるに代りて)

梟のこゑする森の杉の上にひかりも青き月いでにけり (吉祥寺にて)

とりどりにさきみだれつつつくるはぬまがきの菊もおもしろきかな (垣菊)

雲間より星のかげ見しうれしさは月にまされり五月雨のころ

庭松をはなれし月のまたさらに銀杏のかげにたちかくれつつ



中垣のへだてを越えてわが宿の松にもかかる  
蔦もみぢかな (隣家紅葉)

君がため手折る志きみの露の上におきそふ露  
は涙なりけり (友の墓に詣てて)

夜はふけて待たぬ月だに出でにけりはやくも  
なのれ山ほととぎす (待杜鵑)

耳塚のありてふことをまつろはぬからのえみ  
しにきかせてしがな (日清戦役のころ)

潮沫うねの凝りてなりにしから國も瓊矛むすこのみいづ  
今ぞ知るらむ (おなじころ、多賀の宮にて)

わが宿の八重の志ら菊その色の一重は月のひ  
かりなるらむ (月前菊)



さくら炭かきおこしつづ寝たる夜の夢にも聞  
きつうぐひすのこゑ

風さむみねざむる親のそのために炭さしそへ  
む夜半のうづみ火

久方の雲の上なる御庭みにはにはいつもさやかに月  
のてるらむ（高輪御殿の觀月の御宴にはべりて）

うぐひすも花にこころやよせぬらむ櫻にちか  
き松に啼くなり（松上鶯）

高嶺たかねにもはや來つらむか二荒山足のもとゆく  
雲もありけり（二荒山にて）

鬼のすむ安達が原も君が代はくるまの上に寝  
て過ぎにけり（汽車のうちにて）



うきことのまこと聞えぬものならば住みても  
見まし耳なしの山（耳なし山にて）

吾妹子にねやの妻戸をあけさせて寝ながら今  
朝の雪を見るかな（朝雪）

汝もまたおなじころに志のぶらむおもふか  
た野に啼くほととぎす（名所杜鵑）

みな人のなげきや凝りてのぼるらむ豊島が岡  
の秋の夕霧（山田顯義伯の御墓にて）

朝日かげのぼるを見れば神路山神代とほくも  
おもはざりけり（目出山）

もののふの屍さらししあとぞとも知らでや人  
の花を見るらむ（上野山にて）



松風にわが身をなしてかき鳴らす妹が小琴の  
音にかよはばや（松風和琴）

あひ見ぬは君がなさけとおもへども思へども  
なほくやしかりけり（富本氏の追悼録『忍の露』のはじめに）

太刀佩かでありく姿をちはやぶる香取の神は  
いかに見まさむ（香取神宮にて）

わかれかねやすらひをれば夏衣かとりの森に  
ひぐらしのなく（同）

もしほやくけぶりにつづく里もなし浦回（うらまへ）の小  
舟誰か漕ぐらむ（漁村烟）

春の日も長くやなりし暮るる待たで花にねぶ  
れる蝶もありけり（遅日）



ふく風に軒の志のぶの露ちりて月おもしろき  
夜半にもあるかな(夏月)

さきつやと軒端の萩に露ならでまづおかるる  
は心なりけり(萩未開)

あづま路のなこそこの關もとざさねばのどかに  
越えて春の來つらむ(春從東來)

大原女がいたたく柴もぬれにけり北山あたり  
まぐれしぬらむ(名所時雨)

山里は外にきこゆるものもなし笥のおとのそ  
れならずして(山家水)

つり絲にこころつなぎて老の波よるとも知ら  
ず世をわたるらむ(漁翁)



うきことは聞かじともる山かげに何みみづ  
くの夜ただ啼くらむ (山家鳥)

かぢ枕ゆられゆられてあかし瀉ねられぬ夜半  
を千鳥啼くなり (旅泊千鳥)

劔太刀さやぎたたかふ夢さめてきくもわびし  
き萩の上風 (萩)

さく花の下ゆく時は大井川水のこころものど  
けかるらむ (春川)

折りてよと花さく椿ゆびさしてわれを呼ぶ子  
は誰が子なるらむ (春のころそぞるありきして)

鳩の啼くこゑも志めりてこのゆふべ八幡<sup>や</sup>の宮  
に春雨ぞふる (鎌倉なる八幡宮にて)



丹波路の雲にひかりは消えにけり影も清洲の

秋の夜の月 (詠史)

あしたづのかげより外の影もなしいかに晴れ  
たるみ空なるらむ (晴天鶴)

摘めばかつ千代のためしのうれしさも袂にあ  
まるはつ若菜かな (若菜)

朝ぎよめせましとおもふ庭の面に桐の葉ちり  
ぬ秋や立つらむ (立秋)

朝風にまだまら雪のふるころはにほひもさむ  
き梅のはつ花 (早梅)

手折りてし小萩の露やかかりけむ翅おもたげ  
に胡蝶飛ぶなり (秋蝶)



夕月のかげは見えねどはつせ山かすみをもる  
る入相の鐘（山寺夕）

ふるき世を志のぶ袂に風さえてふみぞわづら  
ふ雪の下道（鎌倉なる雪の下にて）

みづえさす櫛のこずゑに風たちて古葉こぼる  
る谷の下道（新樹）

桐の葉の落つるまでにはあらねども身に志み  
そめぬ庭の朝風（初秋風）

清見湯底にうつれる富士の嶺ねの雪にも似たる  
波の色かな（波上山色）

水鷄をば水鷄のこゑと聞くばかり訪ふ人もな  
くなれる宿かな（閑居水鷄）



もののふがとるや眞弓の矢竹さへ笛にきらる  
る世となりけり

あしたづのあとある雪をかきわけて摘みし七  
草君におくらむ (若菜を人におくるとて)

川柳ひと葉こぼるる水の上に秋の色さへ見え  
わたるかな (秋色)

うばらとはおもはれぬまで針ごとにむすびと  
めたる露の白玉

うぐひすはうらみがほにも啼きにけり折りし  
あとある梅の下枝に (鶯)

をみなへし花さく野べの夕露にぬれて伏した  
り尾花かるかや (秋草)



はやぶさに蹴られてにぐる白鷺の羽ふきちら  
す磯の秋風

まぐれふる旅のやどりのつれづれに歌かきつ  
けぬ菅笠の上

うきことのあるたびごとに君まさばまさばと  
ばかり思ひけるかな（梧陰先生の御墓にて）

名もあらぬ草葉の上の露にだにみ空の月はや  
どるなりけり（月露にやどるといふことを）

西窓になかばは見ゆる芭蕉葉のやれめより吹  
く秋の初風（初秋風）

をとめ子が髪のかざりのつくり花見つつ逐ひ  
ゆく蝶もありけり（春興）



世に媚びぬこころも見えてなかなかに痩せた  
る菊のおもしろきかな

なき父のうつしゑとりてながめけり今宵の月  
に寝もやらずして

ふく風にきえしともし火ともさずてそのまま  
軒の月を見しかな

雪折れのあとある竹にふく風は夏もつめたく  
おもほゆるかな（竹風忘夏）

加茂川のすずみのうてな夜はふけてのこるは  
月とわれとなりけり（納涼）

山寺にたえず焚くなるそらだきのけぶりの末  
か峰の白雲（山寺香煙）



うき雲のたえまに星も見えそめて霽るべくな  
りぬ五月雨の空 (五月雨初霽)

世の中の人のこころのあくた川すむべき時を  
いつとか待たむ (時事)

うつしうゑし紅梅の花さきにけりもとのある  
じに文ややらまし

山寺の関伽井の水にちる花をそのまま汲みて  
手向けにはせむ (山寺落花)

なく蟲の音にかよへばや風わたる軒端の鈴の  
涼しかるらむ (風鈴)

松かげの風をすずしみうちおけば扇の上に露  
のこぼるる (松陰納涼)



わればかりここにのこして比叡の山いづこに  
雲のいでてゆくらむ(雲出岫)

歌まくらたづねたづねて寝る夜半は月と花と  
の夢のみにして

あつめたる窓のほたるよこころあらば子をお  
もふ闇をてらせとぞ思ふ(螢)

山かげにあるかなきかの水なれど濁らねばこ  
そ人も汲みつれ

事しあらば君が御楯とならむ身のなかくば  
かり痩せはてぬらむ(病に臥して)

春もなほ訪はぬを人のなさけにてはらはぬ花  
の雪を見るかな(落花如雪)



鷄ニトリのこゑぞきこゆるこのおくに家やあるらし  
岡の松原

ふるさとの妻子つまこいかにと寝もやらで雨ききを  
れば雁なきわたる（郷思）

さくら木の枯枝たきてさむき夜を賤とかたれ  
りみ吉野の里（山家冬夜）

狼のかよひしあともそのままに雪はのこれり  
木曾の山みち（深山殘雪）

つくづくとわれ見てをれば夕露のたえずこぼ  
るる庭の萩原（萩露）

夕日かげはやかたぶきし山かげにいつまで子  
らの椎ひろふらむ（初冬山興）



さくら花ちるともよしや吉野山われはむかし  
の跡をたづねむ (名所山)

うぐひすの初音ききつと見し夢のさむる枕に  
梅かをるなり (梅薫枕)

春秋のあらそひやめてさくら木も楓もともに  
わかみどりせり (新樹)

かへりきてぬぎし衣の袖よりも二ひら三ひら  
ちるさくらかな

やり水はたえていく日ぞ落葉をば落葉のたた  
く音ばかりして (山家冬)

ねぐらへといそぐ鴉もなにとなくながめられ  
けり秋のゆふぐれ (秋夕)



朝夕に手にとりなれし筆すらもおもふままに  
はうごかざりけり（寄筆述懐）

水上にをとめが伴（とも）のかげ見えて里の小川を根  
芹ながるる（春川）

雪釣をとりはらひたる庭松に春のいろさへ見  
えわたるかな（春色）

こころして錆はつけねど劔太刀つひにとり佩  
く折はなからむ（太刀）

うき雲はふもとなしてゆふべゆふべ高嶺（たかね）の  
月は澄みわたるらむ（嶺月）

さまざまに色ある菊も見えにけりみやこにち  
かき秋の山里（山家菊）



ふるさとのいよいよ遠くなるままに夢はいよ  
いよ見えまさりつつ (旅夢)

とりどりに君が千とせをいはふらむ色こそか  
はれ黄菊志ら菊 (寄菊祝)

冬の夜のさえゆくままにうづみ火の消えにし  
人をわれ志のぶかな (冬懷舊)

青柳に風吹くをりは池水の底のかげさへなび  
くなりけり (風前柳)

けがれたるこの世の中にとどめじと君が歌を  
ば君は焚くらむ (宮崎氏の晴潮焚詩の初めに)

焚くといふ歌の上には世をなげく君がおもひ  
も見ゆるなりけり (同)



世をいとふこころの月のかげまでもさやかに  
やどす水莖のあと(同)

筆あまたはなむけにせむ別れなば君が文のみ  
戀しかるらむ(池邊義象君の渡歌をおくりて)

國のため君が身を厭へ君が身は君が身にして  
君が身にあらず(同)

わたつみの神もまもれよわが思ふ友どち一人  
この舟に乘れり(同)

いくそたびかへりみすらむ舳はに立ちて波間に  
うかぶ富士の遠山(同)

### 藤衣

明治廿九年十二月十一日午後十一時、わが養父  
直亮は、身まかり給ひぬ。その夜、枕べに侍りて、



一ことはものをのたまへ寝もやらでわれさも  
らへり御枕のへに

燈火のかけいと暗うなりたれば、

かかげてもかひこそなけれ夜もすがら涙にく  
もるともし火の影

寒からむとて、父の衣とりいでて、母の著せければ、

なきおやのめぐみのほども知られけり形見の  
衣の綿あつくして

昨日拭ひし太刀を手にとりて、

父君のかたへにありてこの太刀をわが拭ひし  
は昨日なりしを

すぎこしかたの事どもを考ふるにくやしきこと  
のみ多かりければ、

かくもせむともせむと思へど父君ははや世に  
まさずあはれいかにせむ

あくる朝、小中村義象君より使あり。文に、父君のう  
せ給ひしはまことなるかと、志るしあり。やがて、筆  
とりて、かへりごとす。



今朝までも夢かとはかりたどりしにさめぬを  
見れば現うつなりけり

父の身まかれるも知らで、文おこせたる人々あり。

この世には名あての人もおはせぬを誰に見よ  
とのたよりなるらむ

靈前にむかひて、香をくゆらす。

なき人のためにわが焚きたきもののけぶりも  
今朝はむすほほれつつ

摺澤静夫君は、仙臺の人なり。君は、歩兵少佐にて、現に近衛の大隊長なり。父の身まかれるを聞きて、やがて、たづね給へり。父の仙臺にありし時、學生を教育せしは、おびたゞしきものにて、あるは軍事に、あるは法律に、あるは教育に、あるは事業に、その従事する所こそ同じからざれ、その名の世に聞えたる人々は、實に多かり。摺澤君もその一人なれば、互に父の事どもをかたりいでて、

おく露はひとつなりしをいろいろに萩の花さ

く宮城野の原

その日の夕つかた、山寺の鐘いと悲しうきこえければ、



かくばかり悲しきものと昨日まで聴かざりつ  
るを入相の鐘

父の寫眞をもとめむとて、箱などかいさぐるに、岩  
倉具視公の寫眞を見いてたり。公の世におはせし  
ほどは、わが父をいみじう愛せられき。公のうせ給  
ひし後は、父の志のひまつること、ことわりにも過  
ぎたり。かくて、月毎に、海晏寺に詣でなどしければ、  
こたびの事を公に告げまゐらせむとて、

召しいでてあはれはかけよわが父は君がみも  
とへ今日たちいでぬ

尾崎行雄氏の父君、わが叔母の死去を、父の死去と  
聞きたがへて、とぶらひの文、おこせられぬ。驚きて、  
そのあやまりなるよしをいひやりしに、程なく、父  
も身まかりしかば、また文おくとて、

このたびはまことに父のうせにしをまたいつ  
はりと君や聞くらむ

國分青崖君は、父の教子なり。第一軍に従ひて、から  
國にあるに、こたびの事をいひやるとて、

はるばるとわがやる雁の玉づさをいづこの空  
に君は聞くらむ

出棺のをりに、



父君よはやいでますか泣きさけぶ母もうま子  
もみなあとにして

久しう飼ひおける鶯を放ちやるとて、

はなちやる籠のうぐひすこの春は父の御墓の  
梅に啼かなむ

はふりの日、風いと荒く、夜に入りても、なほやまず。

まどろまば夢にも父の見ゆべきにこころなく  
吹くさ夜あらしかな

墓前に手向けたる榊葉の霜の消えゆくを見て、  
おく霜は露となりてもものこりけり今朝手むけ  
たる榊葉の上に

わが去るべに、瀧川素介氏といふあり。氏の父君も、  
おのが父と、同じ日に身まかられき。墓さへ、同じ青  
山なりければ、詣づる毎に、必ず逢ふ。一日、共にそこ  
なる茶店に憩ひしに、いかがしたりけむ、とり違へ  
て、おのが外套を著られたり。いささけきわざなれ  
ど、時にとりては、また、悲しさの心も起りてなむ。

たがへしもことわりなれや藤ごろも涙さへこ  
そおなじかりけれ



その後、瀧川氏、わが家をおとづれられぬ。くさぐさの物語して、夜も更けぬ。氏の歸らるるとき、

いたづらに泣きてこの夜もわかれけり君とわれとは親なしにして

清水廣景氏は、仙臺の人なり。父には親しきゆかりある人なるが、わざわざのぼりきては、ふりの供せられたり。二日三日ありて、氏の歸らむとするに、いとわかれがたうおぼえければ、

さらぬだにかわくともなき藤ごろも今日のわかれにまたぬらすかな

桑原義近氏、さびたる一面の古鏡をもてり。かねて、父にゆづるべき約ありきとかにて、このほど、靈前に手向けられたり。その志のほど、何にかたとへむ。

くもりたる鏡にはあれどわが父を志のぶこころは見ゆるなりけり

高見廣川氏は、熊本の人なり。何か思ふところありしならむ、近く出家して、佛門に入られぬ。父とのまじはり深かりしが、ひと日、たづね来て、めぐりあはむ春をたのみしかひもなく雪と消えにし君をしぞおもふ、といふ歌を手向けられたり。かくて、世の常なきことなど、かたられしが、實にと、うなづかる事のみ多かりければ、



かなしさのうちわすらるるものならばわれも  
まとはむ墨染の袖

除夜に、人人あつまりて、歌よむ。おのれ、ことしは、二人まで親をうしなひしかば、

ふたりまで親にわかれしうき年もかぎりと思  
へばかなしかりけり

父の年は、六十九なり。來む年は、七十の祝をもせむといはれしに、今はさることもかなはず。

來む年はわが七十路のいはひをもせむといひ  
てしあはれ父はや

元日の朝、近き家々にて、若水を汲むにやあらむ、車井の車の音の聞えければ、

年老いし父のこの世にましまさば起きても汲  
まむ今朝のわか水

起きいでても、なほ父の事のみ心にかかりければ、

あら玉の年はかはれどなき父を志のぶところ  
はそのままにして

初夢

たから舟まくらに志きてねぬる夜の夢にも見  
えつ父のおもかげ



久米幹文翁は、わが父の志たしき友なり。父よりさ  
きに身まかられしが、四日の日、その墓に詣でて、

わが父も君があとおひてゆきにけり共にも越

えよ死出の山道

六日の朝はじめて鶯の音を聴く。

まちまちてうれしと聞きしその春は夢なりけ

りな鶯のこゑ

青戸波江君に、父の遺物なる残月といふ硯贈ると

て、

天がける人のかたみと君は見よ雲間にのこる

夜半の月影

わが家は、豊島の里なり。うしろの岡に出でたるに、  
若菜など、やや萌えいでければ、

この春も岡のわか菜は萌えにけり摘みてささ  
げむ父もまさぬに

十七日、雪いみじう降るに、

父君の手栽の松やたおむらむころして降れ  
庭の志ら雪

十八日、曉はやく、墓まうです。青山わたり、雪いと白  
きに、われならでは、跡つけたる人もなし。



あはれとも人は見るらむ御墓へとわがあとつ  
けし野邊のまら雪

夕つかた友人おほくあつまりきたりしが題をわ  
かちて歌よむおのれ春雪といふ題をえて

消えはてし人にもわれはよそへてむまばしは  
のこれ春のあわ雪

\*

いにしへを誰にか問はむまら川の關路は荒れ  
てただ秋の風 (古關秋風)

大洗磯おほしらいそわれおり立てば裾のあたりよせてくだ  
くる八重のまら波 (大洗磯崎にて)

たたかひし荒野の末にもものふの夢のなごり  
か秋風のふく (古戰場)

花のころ母と来て見し山里のさくらの林まぐ  
れそめけり (初冬)



劔太刀身にこそつけね男山たけきところは神  
ぞまゐるらむ（男山八幡宮に詣てて）

かしこくもぬかづく袖にちりにけりうねびの

山の松の下つゆ（畝火の山陵に詣てて）

歌よまむころもあらぬをさな子も玉と見て  
けり萩の上の露（萩露似玉）

草の上は吹きはらへどもわが袖に露おきそふ  
る秋の夕風（秋風）

輿謝の海あさ東風こちなぎてうらうらとかすみわ  
たれり天の橋立（名所霞）

駒のくちゆるめて行かむおぼる夜の月見がて  
らの梅の下道（梅下歩月）



霽れたらばまづ拭はましこの雨に父のかたみの  
太刀や錆びなむ (梅雨のころ)

明治三十年一月十一日、皇太后陛下、かなしくも、

崩御ましましぬ。十三日の朝、雪ふみわけて、参内

せしが、その道すがら、よめる歌どもの中に、

世にまさば歌をも召さむ世にまさば御酒たま  
はらむ今朝の志ら雪

誰がために跡つけさせてみやつこは御庭の雪  
を今朝まもるらむ

かかぐべき簾おろしてこの雪に少女がともは  
物おもふらむ

君を志のぶ民のこころにくらぶればまだまだ  
あさし今朝の白雪



千代までと祈りまつりしかひなさを雪に折れ  
たる松に知るかな

よそふべき君しまさねば御園生そのよの松をも雪の  
降りうづめけむ

歌めさむ君もまさぬをおもしろく御庭に雪の  
なにもるらむ

まばしだにわすれまつらむすみぞめの袖ふり  
かくせ今日の白雪

ふたたびはかへりきまさぬいでましのよみ路  
につもれ今朝のまら雪

すみ染の衣をつけて御園生の雪を見むとはお  
もひがけきや



去ら雪の消えましし君をおもひいでて誰しも  
今朝は袖ぬらすらむ

九重の御庭の雪は色もなし出で入る人のそで  
くろくして

ふりかかる雪はなみだにかつ消えてたもとの  
ぬれぬ人なかりけり

去ら雪のふりにし世々のふみ見てもこれより  
ふかきおもひなからむ

ふりつる雪は下より解けにけり今日のうら  
みよいつ消えぬらむ



明治三十二年の春病にふしてよめる歌どもの  
中に

わが歌をかきてと人に乞ふばかり病おもくも  
なりにけるかな

寝もやらで志はぶくおのが志はぶきにいくた  
び妻の目をさますらむ

父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見  
れば死なれざりけり

上野山花はさかりになりたりと聞きつるもの  
をわれ床とこにあり

くさぐさの薬の名をも知りにけりおのが病や  
久しかりけむ



たれこめしわが身も春のゆくへをば君がなさ  
けの花に知るかな

胸におくこほりぶくろのあつ氷とくわが病癒  
えよとぞおもふ

逢ふこともかたくやならむと故郷ふるさとの母のうつ  
しゑとり見つるかな

な逢ひそと醫師いしはいへりあはずしてかへしや  
らるる君ならなくに

床とこにありて物思ひをれば小簾こすだの中にまたも散  
りきぬ花の一ひら

よむままに病もわれはわすれけり歌やこの身  
のいのちなるらむ



君も病みわれもまた病めりあはれあはれなす  
べき事もおほきこの世に

病みふして明日だに知らぬ身にもなほ世のゆ  
くすゑは思はるるかな

ともすれば膝になみだはこぼれけりいかに弱  
りしところなるらむ

このままに永くねぶらば墓の上にならず植  
ゑよ萩の一むら

世をまかる歌おもふまでなりにけりおのが命  
もかぎりなるらむ

吾妹子の肩によりながら庭に出でてちりゆく  
花を今日見つるかな



ねざめしてわれ見てあれば枕邊にきえむとす  
なりともし火のかげ

\*

阿伽の水汲まむとすれば谷川に白くうつれり  
志ら藤の花

うちぬれし袂もいまだかわかぬにふたたびわ  
くる野べの白露 (兄を失ひし人の、また、姉にわかれば)

二〇二

二〇三

残しおく子らを志のびていくそたびかへり見  
すらむ死出の山道 (同)

むらさきの雲にも似たる藤の花佛こひしくな  
りにけるかな

明日志らぬ身をばわすれて大かたに人は聴く  
らむ入相の鐘 (暮鐘)



なき人の魂のゆくへかふる塚の卒都婆のかげ  
に螢飛ぶなり

植ゑましし父はまさねどこの夏もさきいでに  
けり撫子の花

君ならで千とせの友はなかるらむたち舞ふ鶴  
のまたかへりきぬ (人の賀に)

花よりも君がむかしや志のぶらむ夏もきこゆ  
るうぐひすのこゑ (寄殘鶯懷舊)

旗すすきなびく野末にいまもなほ啼きてあら  
そふ蟲のこゑごゑ (古戰場蟲)

松蟲のこゑをたづねてこのゆふべ野守が家に  
われは來にけり



時わかぬものとおもひし庭松にはやくもひび  
く秋のはつ風 (早秋風)

誰もかくわがごとものおもふかと問ひても  
見ばや秋の夕ぐれ (秋夕)

御苑<sup>みその</sup>なる青葉がくれのさくら花君もまさぬに  
風にかをれり (有栖川宮の御追悼に、殘花薰風を題にて)

螢おひて遠くもわれは來りけり子をおもふ闇  
にふみまよひつつ

聞きて見ていかに心を澄ますらむ庭の松かぜ  
軒の月かげ (祖厚禪師の草庵をおとづれて)

音たつる風しあらずば憂きものかずには入  
らじ庭の萩むら



簞蟲にわれあらねども秋風になき父をのみ戀  
ひわたるかな

小瓶がめをば机の上へのせたれどまだまだ長し志  
ら藤の花

神路山千とせの杉の千とせまでてる月かげも  
君や見るらむ (磯部畫伯の還曆のいはひに)

君の如き筆をしもたばいはひにもかきおくら  
まし野べのわか松 (同)

朝ぎりの低くたなびく秋の野に梢を見せてち  
るもみぢかな (野紅葉)

もみぢするかたに残れりゆく汽車のけぶりや  
おのが心なるらむ (程が谷にて)



たぶれらを斬りつと見しや夢ならむまくら刀  
はそのままにあり(夢)

枝ぶりのおもしろき松におもしろくかかりて  
咲けり白藤の花

ともすればうき世にかへるわが夢をやぶるも  
うれし峰の松風(山家松風)

みくるまは時雨ならねどめぐりゆくその里ご  
とに袖ぬらすらむ(北白川宮の御柩車ををろがみて)

わか松も小松もまげる庭の面の老木の松やう  
れしかるらむ(畠山健氏の父君の賀に)

月かげは見ゆべくもなし位山たかねのあたり  
雲ふかくして(三條篤子の歌のかへしに)



萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきどころ  
こことさだめむ

磯松を今はなれたる荒鷺のゆくへに見ゆる蝦  
夷の遠山

春のものとおもはれぬまであまりにもさびし  
まづけし白藤の花

をとめらが泳ぎしあとの遠淺とほあさに浮環うきわのごとき  
月うかびいでぬ

かたぶきて何をか共におもふらむ二もと立て  
る姫百合の花

君が袖にふれてうごきし白あやめ明日あすむらさ  
きに咲きやかはらむ



磯山の小松を引きてよる波に手あらひをれば  
鶴たづなきわたる

ただひとり式部の墓に手むけして紫野くれば  
雉きざ子すなくなり

山雀の籠かけなれし軒の下またに麻の新草あひもえい  
でにけり

いざ子ども文車ふぐるまひきこ今日もまたかの繪巻物  
とき聞かせてむ

城あとと聞きにし岡に古瓦ひろひてをれば雉きざ  
子すなくなり

順禮の子を呼びとめてものめぐむ人もありけ  
り秋の夕ぐれ



簪<sup>かざし</sup>もてふかさはかりし少女子のたもとにつき  
ぬ春のあわ雪

吾妹子と摘みし七草おほくしてあまたのこれ  
り鶴にあたへむ

鯉にとて投げ入れし麩の力にもたちわかれた  
る浮草の花

病める身ははかなきものよ人よりも二十日お  
くれて衣がへせり

わが宿をとふ人たえて志をり戸のかけがね鏝  
びぬ五月雨のころ

たをりきてわれ手むけぬとなき人の母にない  
ひそ姫百合の花



霜やけの小さき手して蜜柑むくわが子志のば  
ゆ風の寒きに(安房にて)

長谷寺はこれより右と志るしたる石をぬらし  
てゆく志ぐれかな

あかつきの闇の志ぐれのあはれさも戀せぬ人  
は知らずやあるらむ

庭鳥も雛をいだきて埒よきのうちに寒さをわぶる  
このゆふべかな

霜よけをのけたる庭の萩の芽にぬるくもさは  
る春のはつ風

月ふけて窓にうつれる梅が枝の影よりほそく  
わが身痩せたり



病む人の戸口にかけし乳入ちちいれを夜すがら鳴らす  
木がらしの風

雷かみ落ちて片枝かたえ枯れたる老松もなかなか村のけ  
しきなりけり（安房なる柏崎にて）

このゆふべちぎりし人を待ちわびて三たびめ  
ぐりぬ庭の萩原

遠くちかくひびく五山ござんの鐘の音も聞きわくる  
まで里なれにけり（鎌倉にて）

牡蠣かき殻がらをのせたる蟹が屋根の上に鶺鴒きりぎりすなきて  
日は暮れむとす

おくところよろしきをえておきおけばみなお  
もしろし庭の庭石



めぐりあひし男星女星のむつごとも聞くべく  
秋の夜は更けにけり

やよや子ら東鑑あづまかがみにのせてある道はこの道春の  
わか草

ぬれながら縁えんにのぼれる庭鳥に音なき春の雨  
を知るかな

かへれとはのたまはねども母君のをりをりも  
のをおぼす時あり（年久しく朝鮮にある弟のもとに）

わづらへる鶴見にゆくと老僧らうそうの庭に出でたり  
夜の寒けきに

椿さく久能の御阪みさかの七まがりまがりてくれば  
雉子きぎすなくなり



をとめ子が繭入れおきし手箱よりうつくしき  
蝶の二ついできぬ

比叡の山七日こもりて下りきたる身にまた吹  
くよ人の世の風

蚊の睫おつる音をもきくばかり座禪の御堂夜  
は更けにけり

さわさわとわが釣りあげし小鱸をすずきの白きあぎと  
に秋の風ふく

わが歌をあはれとおもふ人ひとり見出でて後  
に死なむとぞ思ふ

田端にて根岸の友に逢ひにけり蛙なくなる春  
の夕ぐれ



ましろなる石よりなれるこの少女おのれきざ  
まば衣きぬきせましを

藪やぶ中なかの一もと榎えんけふもまた鳩とびぞ啼なくなるきの  
ふの枝に

櫻花さくらまばしはちるなゆく水みづに瘦すくせし二人の影  
うつし見む（桂月と小金井にものして）

妹が家の籠かごの鸚鵡かへりもわれを見て名なを呼よぶまで  
に馴なれにけるかな

病やまみながら旅たびゆく君きみが管くだ笠かさに吹ふかずもあれな  
秋あきの夕ゆふ風かぜ

まばしとて腰こしかけたるもえにしなり歌うたふるし  
おかむ野のの一つ石いし



波とほく月いでそめて砂の上に君とわれとの  
影はうつりぬ

碁をくづす音ばかりして旅やかたまづかに春  
の夜は更けにけり

砂の上にわが戀人の名をかけば波のよせきて  
かげもとどめず

おもしろく雪はつもれり早川の瀬にあらはる  
るいはほの上に

片假名のかたなりながら文かきて子はおこせ  
たり年のはじめに (安房にて)

露ふかき野路の石ぶみよみをれば蟲なきいで  
ぬ日はかたぶきぬ



道ばたの石のほとけの花立はなたちに野菊のぎくにほへり誰  
が手向けけむ

たちこめしかすみのおくに順禮じゆんらいの歌もきこゆ  
る長谷の山道

海見ゆるこの掛茶屋かぢやにやすらひて歌おもひを  
れば千鳥ちどりなくなり

この松はわが曾祖父いそぢぢの植ゑたりとかたるその  
人また老いにけり

渡殿わたどのをかよふ更衣かぢえの衣きぬの裾すそに雪とみだれてち  
るさくらかな

銃つつとりて山へ入りにし人もあり子をおもふ雉きせき  
子すこゑたてずあれ



道ばたの芭蕉の翁をんの石ぶみを半うづめてつも  
る雪かな

梅かをる宿なつかしみ訪ひくればあるじも妻  
も歌よむといふ

小式部の墓に詣でてかへりゆく人も見えけり  
おぼろ夜の月

里の子にたちまじりつつ寺の門かどに年わかき尼  
の羽はねつきてあり

小式部の墓のさくらに風たちて花の雪ふる那  
古の山阪

焼跡にかれがれ梅はさきにけり二たびたてよ  
茅かやふける家



山寺の石のきざはしおりくれば椿こぼれぬ右  
にひだりに

明けなばと羽子板だきて母のもとに寝たるわ  
が子よ罪なかりけり

わが宿は田端の里にほどちかし摘みにも來ま  
せ鈴菜すずしろ

千鳥なく堤の風をさむしともわれは思はず思  
ふ子ゆゑに

瀧壺に落ちて沈みてまた浮きて椿ながるる谷  
川の水

若菜摘む友禪あかき舞子らもをりをり見ゆる  
岡崎の里



松かさの落ちたる音におどろきて小鳥たつな  
り谷の下道

をさな子の柩おくりてゆく母の涙か露か小野  
のかや原

はしき子の手向草にと庭におりて萩の花折る  
秋の夕ぐれ

このゆふべわれただひとり過ぎにけりうづら  
啼くなる深草の里

藤壺に歌あはせありと小式部を召したまひけ  
り春の夜の雨

大かたは掘りくづしたる貝塚の貝をぬらして  
ふる時雨かな



かきえざる手のつたなさはいはずして罪なき  
筆を又折りにけり

血に泣けどあはれと聞かむ人もなみ山へかへ  
るか山ほととぎす (僧某をおくりて)

わがこころ告ぐべき人もあらざれば歌にかく  
れてこの世おくらむ

病む母のまくらべちかくさもらひて今宵も聞  
きつあかつきの鐘

猿曳の背にねぶりゆく猿の子をおどろかして  
もふる霞かな

昨日まで萩にすすきにおとづれしものとも見  
えず木がらしの風



町中の火の見やぐらに人ひとり火を見て立て  
り冬の夜の月

をさな子の佛の棚に雛おきて桃の花をば君手  
向くらむ

早川の瀬にさからひてとぶ鮎のひかりすずし  
き月のかげかな

枯れのこる浮葉の上に蓮の實の飛ぶ音さむし  
冬やきぬらむ

家刀自が明日のまうけにきる蕎麥の音もふけ  
ゆく更科の里

蛸壺に植ゑたる梅のさく見れば蟹が苦屋も春  
は來にけり



あたらしき藁屋も見えてところどころ麥の花  
さく那須の篠原

鶉の啼くこゑもきこえてかた岡のくぬぎのは  
やし日は斜なり

國分寺のあとと聞きにし菜畑なばたけに古き瓦を見い  
でつるかな

螢籠手にもちながら夜車よぐるまに乗る人おほし宇治  
の山里

床の間に焚ける香爐のけぶりをも残して夏の  
夜はあけむとす

あらひ髪風にふかせて釣殿に蓮見る人やすず  
しかるらむ



おもしろき山松あまた立てりけり今宵の月は  
ここに眺めむ

犬蓼の花さかりなる里川に夕日ながれてあき  
つ飛ぶなり

馬屋まやのうちに馬のものの食ふその音もかすかに  
きこゆ夜や更けぬらむ

庭鳥のあさるおち葉のあひだより黄菊一もと  
あらはれにけり

観音をきざむ佛師ぶつしが小刀こがたなのひかりもさむきと  
もし火の影

古寺の羅漢の軸のつぎめさへぬれてはなるる  
五月雨のころ



かたかたの袖をかたみにぬらしけりせばきこ  
の傘合傘にして

こころみに扇の上のせて見む一ふさ手折れ  
夕がほの花

宮城野に君しかへらば秋ごとに歌もて萩のた  
よりきかせよ

里川のながれの見ゆる柴の戸に月まちをれば  
水鶏なくなり

酔ひまれしあるじをおきて馬ばかりわが家へ  
いそぐ小田の細道

名もまれぬ小さき星をたづねゆきて住まばや  
と思ふ夜半もありけり



沈みたる錢の數さへ見えにけり地藏たたせる  
岩の眞清水

よき種と聞きて買ひきて植ゑて見しわがおる  
かさよ朝顔の花

禮みぎなしてゆきすぎし人を誰なりと思へど遂に  
思ひいでずなりぬ

春の日はまだまだ高したちよりて讀みてもゆ  
かむ壺の石ぶみ

おもしろく梅さく門を見かへればわが知る人  
の名札なまかかれり

桐ふた葉庭にちりきぬ秋風を知りそめたるは  
いづれなるらむ



草も木もおなじものとはおもふまじ春の春雨  
秋の秋雨

楨の戸をおしあけがたの庭の面にほのほの見  
えてちる櫻かな

日ごと日ごとゆきてながめしかの岡の一もと  
櫻はやちりぬらむ

三足四足あとへもどりて松が枝の藤の花をば  
あふぎ見しかな

文机ぶくろのすずりの石に蓋ふたをしてはらはばはらへ  
床の花びら

雛棚ひなだの小瓶こびんににほふ姫桃ひめももの百ももとせいませ色あ  
せずして



夕日かげななめにうけて里川の岸の合歡ねぶの木  
ねぶりそめたり

奉納の手拭うごく朝かぜに杉の露ちるみたら  
しの水

二つ三つ摘み残されし綿の實の色さむげなり  
冬の山畑

木の芽つむ歌おもしろみ筆とりて日記にに志る  
しぬ宇治の山里

うちなびく船のけぶりの末くれて神戸のみな  
と月いでにけり

歌の書よみふた卷三卷座にちりてあるじは見えず  
またたづね來む



ふるさとの煉瓦の築土<sup>つち</sup>苔むして歌に入るべく  
なりにけるかな

大かたはあとのうまやに宿とりて夜みちをゆ  
くはわれ一人のみ

富士の嶺<sup>みね</sup>に寝てこころみむわが夢は天にいな  
むか地に落つらむか

生死<sup>いし</sup>の界<sup>さかい</sup>はなれし君なれどなほ千代ませとい  
のらるるかな (僧愚庵に)

ただ一つひらきそめたる姫百合の花をめぐり  
て蝶二つ飛ぶ

わが宿の萩に露おく夕ぐれを訪へとおもひし  
人は訪ひきぬ



萩の花さきしあしたも萩の花ちりし夕も君を  
こそおもへ

なき人の手むけにせむと白百合の花を夢にも  
折りてけるかな

ふるさとの野寺の池は田となりてそのかたす  
みに蓮さきにけり

せきいれていく日もあらぬわが庭のやり水の  
あたり水鶏なくなり

かの人の目よりおちなばいつはりの涙もわれ  
はうれしと思はむ

いつはりと知りつつまたも泣かれけりいかに  
めめしきこの身なるらむ



身の上を聞きても見ばや門とに立ちて筆賣る人  
のはづかしげなる

歌をよむ友とも知らではしためのことわりた  
るよ月もある夜に

月もはや西かた町をおりくればおく霜志ろし  
から橋の上

狐とるとかけたる罌わなに霜おきてあけがた寒し  
小野の萱原

稻蟲に田は枯らされてこの秋も落ちしままな  
り里の大橋

外國とくにのたねのまじらぬ犬の子もたまたま見ゆ  
るみ山べの里



わがやどの紅葉を見にと歌の友の二人かへれ  
ば三人とひきぬ

けがれたる人のこの世にめづらしと神もおほ  
さむわが祈る戀

緒のきれし琴を志らぶるここちして君うせし  
後は歌もいでこず

君が弾く小琴の絲にのるばかりきよき志らべ  
の歌をしぞ思ふ

かの人と舟をつなぎてもるともに泣きしはこ  
こよ磯の松原

かの人歌にのぼりし夕より戀しくなりぬあ  
か星の影



原町にめしひ二人<sup>ふたり</sup>が杖とめて秋のゆふべをな  
に語るらむ

うたたねに風をひくなと羽織ぬぎてかけたま  
ひしよはしき姉君

なき父よりれしとおぼせこの年も刀ばかりは  
賣りのこしたり

わがやりし追羽子の羽<sup>は</sup>うちそれてはづかしき  
人の袂に入りぬ

姪にとてよべ買ひきたる羽子板のそのうらま  
ろし歌志るしやらむ

袴をば買ひきて今日ははかせ見むわが子よこ  
とし五つになりぬ



羽織もちて母の梅見の御供<sup>みとも</sup>せむまだ寒からし  
木下川<sup>がほ</sup>の里

中川の橋守る爺<sup>おぢ</sup>が數へる錢の音さむし夜や  
更けぬらむ

ここかしこ温泉<sup>いんげん</sup>おちくる谷川のけぶり斜に夜  
はあけにけり

わきいづる湯川の末もこほりけり夜風やさえ  
し鹽原の里

いかにもせむすべなしやわが戀ふる人はこ  
の世の人とし思へど

竹三もと蘭このかぶいはほ四つその巖めぐ  
り清水ながれぬ



今朝のみはまづかにねぶれ君のために米もと  
ぐべし水も汲むべし

身ひとつは山に入りてもありぬべし君をいか  
にせむ親をいかにせむ

歌かきて佛の前にすてて來し蓮の花びら君見  
つらむか

このたびはいはむと思ひしそのことをいはで  
またまた別れぬるかな

ともすれば戀の歌のみよみたりしその人つひ  
に尼とはなりぬ

この石に君とわれとの名をかきて妹脊の川に  
うち沈めばや



行きくれて一夜のやどをわれ乞へばみめよき  
女な櫓ぼた火びたきてあり

黒駒に志づ鞍おきて志べりやの雪のけしきも  
見まほしきかな

秋風のさむしとおもふこのゆふべ籠飼かごかひのうづ  
ら聲たてつなり

入相の鐘のきこゆる山寺をたづねて見ばやた  
だ一人して

たらちねの母にだになほもらしえぬうれしき  
夢をよべ見つるかな

秋風にふきやぶられし手枕の夢のゆくへは君  
ぞ知るらむ



をさな子が乳にはなれて父と共に寝たるこの  
こと日記にきに志るさむ

父と母といづれがよきと子に問へば父よとい  
ひて母をかへりみぬ

踏切のこなたの岡のもみぢ葉は煤すすにすすけて  
色にいでにけり

色にいでしこのもみぢ葉に歌かきてつれなき  
人におくりても見む

君とわれとただ二人して眺めたる今宵の月よ  
いつかわすれむ

わが子をばいくさにやりて里の爺おやがむすめと  
二人早苗よたりとるなり



わが巢にと雀のはこぶ鳥の羽をかるくもさそ  
ふ軒の春風

一坪に足らざるうらの菜畑なばたけに黄なる蝶とび白  
き蝶とぶ

さきつづく堇たんぽぽなつかしみもと來し道  
をまたもどりけり

蘆邊あしべゆく鶴たづのあゆみも春の日はいよいよおそ  
くおもほゆるかな

おぼろ夜の月も更けぬとわが友のかへりしあ  
とに笛落ちてあり

梅のえだ文箱ふでばこにそへてうぐひすの初音の里の  
妹におくらむ



さくら見に明日はつれてとちぎりおきて子は  
寝ねたるを雨ふりいでぬ

うちうてば石にもこゑはあるものをいつまで  
つらきころなるらむ

わが戀ふる歌てふものの人ならば瘰せしこの  
身をあはれと思はむ

姫君の琴の志らべもかきたえて御庭の牡丹花<sup>はな</sup>  
志づかなり

月ふみて水鶏を聞きにいでませと根岸の友は  
ふみおこせたり

ほととぎす啼くべき時になりにはけりひと日は  
訪はせ駒込の里



たたりありと切り残されしこの村の一もと榎  
わか葉しにけり

おくつきの石を撫でつつひとりごといいひてか  
へりぬ春の夕ぐれ

去年の夏うせし子のことおもひいでて籠の螢  
をはなちけるかな

何事もたのむたのむといひながらわが手をと  
りて友はねぶれり

うつしゑのうすくなるまで年へてもかへりき  
まさずわが戀ふる君

岩清水たちより見ればその底にやせしわが影  
老いし松かげ



うかれ女を妻にすと聞きしこの家の門田はい  
まだ鋤きもかへさず

岩かげにつつじ折らむとおりたちて鶴鴿の巢  
を見いでつるかな (三荒山にて)

一たびは瀧となりても落ちつるをまたたちの  
ぼる峰の志ら雲

刈りこみし門の生垣いひがきまたのびてこずゑそろは  
ずなりにけるかな

釣殿にあかつきはやく立ちいでてひらくはち  
すの音ききしかな

庭守のはさみの音を聞きながら志ばしすずみ  
ぬ松の下かけ



庭ぎよめはやはてにけり絲萩をむすびあげた  
るその繩をとけ

あたらしくたてし書院の窓のもとにわれまづ  
植ゑむ萩の一むら

うつしうゑし菊の若苗ねがはくは白き花のみ  
さけよとぞおもふ

花瓶がびんの水とりかへねわれにとて友はおくれり  
小百合なでしこ

色やあると紅梅の花におく露を紙におとして  
見るをとめかな

庭の面にちりにし花の塵のみはそのままにお  
けまばしながめむ



萩見にと訪はしし君が杖のあとはまだ残れる  
を庭のかよひ路

窓の外ほかに竹二もとを植ゑにけりこよひは月も  
まちてながめむ

秋風に柳ちりくるこのゆふべつくづく戀をや  
めむと思ひき

おなじ月をおなじ川瀬におなじ友とことしの  
秋も來て見つるかな

姫君のたもとにふれてうごきたるかの萩のえ  
だたをりてゆかむ

病みふして床にある身は人よりもはやく知ら  
れぬ秋のはつ風



このめぐり幾尺いくさかあると四人よにんして抱たきて人見ぬ  
神の古杉

山寺のおくのぬれ縁えんくちそめて羽は蟻ありむれたつ  
春の夕ぐれ

ここよりは車かへして蟲の音を聞きつつゆか  
む岡ごえの道

窓の外ほかに二もと三もと竹うゑてさびしき夜半  
の雨を聞くかな

から國のいくさ見にゆく君なればこの紐ひも刀がたなは  
なむけにせむ

唇のやるればやがて寒してふ齒をくひしぱり  
われなげくかな



秋風はいづれをさきにさそひけむ桐の葉おち  
ぬ垣の内うち外とに

法の師に箒はらきをかりてみささぎの櫻の落葉われ  
ぞはらはむ (吉野にて)

あかつきの星のおちきて碎けなば君が歌の如  
きひびきあらむか

小屏風をさかさまにしてその中に寝たるわが  
子よおきむともせず (子のうせにし折)

手向にと泣く泣く乳母が志ちほりたる乳ちちのなか  
ばは涙なるらむ (同)

創てをおひて谷間にくるふいかり猪の牙のひび  
きにちるもみぢかな (晝賛)



庭の面をゆきかふ鶏とりにの志こころだり尾おしにふれてはう  
ごく花すみれかな

草鞋わらじをばはきかへをれば菅笠かぶとの上に椿の花こ  
ぼれきぬ

梅が枝に文をむすびてもてきたる使つかいの童年わらひは  
いくつか

ちる花のゆくへいづことたづぬればただ春の  
風ただ春の水

山里に乳母が家をばたづねきてうれしく聞き  
つ初ほととぎす

千代までもさきくいませと君をのみわれ志こころの  
ぶ山わすれずの山 (岩代なるさる人の賀に、寄山祝といふことを)



名は花子かばねは風間年見ればまだ十七よあ  
はれこの墓（天王寺にて）

この里のあざなとまでもなりにけりいく代へ  
ぬらむ二もとある杉（大和にて）

鳴ふたつねぶれるままに流れけりぬるみそむ  
らむ春の川水

戀のために身は瘦せやせてわが背子がおくり  
し指輪ゆるくなりたり

旅行くと麻の小袋とり見れば去年のままなり  
筆墨硯

瀧壺にわが投げ入れし歌の反古浮きて沈みて  
また浮かずなりぬ



松原のつくるところに海見えて島ひとつあり  
舟ふたつあり

あしたづのそのこぼれ羽もまじりけりかきあ  
つめたる松の古葉に

なさけなき人のこころをおもひいでてわれ抛  
てば筆にこゑあり

すずみする四條の橋にやすらひて知らぬ人と  
もかたりつるかな

蚊やり火に筆のさやをば焚きながら君とすず  
しき月を見しかな

みむすびの神のめぐみにもれずして撫子さけ  
り蝦夷の砂原



瀧へとてわれは來れど扇屋のその名もすずし  
たちよりて行かむ

師の君よよく訪はせりと起きいでて笑みし面  
影いつか忘れむ

さ夜中にひとり目ざめてつくづくと歌おもふ  
時はわれも神なり

細殿にひろひし扇ひらき見れば戀の歌かけり  
誰がおとしけむ

をとめ子は摘みて碎きて棄てにけり薔薇の花  
には罪もあらなくに

ぬぎすてて具ひろひをる少女子が駒下駄ちか  
く汐みちてきぬ



船破れてかへらずなりし子のために狂ひし母  
よ今日も磯にあり

舳にたちて網もつあまが腰蓑こしみのの露ふきはらふ  
磯の夕かぜ

今日もまた磯におりきてよる波をつくづくひ  
とり眺めつるかな

宵にきて天つ少女の忘れたるかざしの玉か萩  
の上の露

あぶら繪に見たるが如きくれなるの雲の中よ  
り夕日さすなり

ふるさとの野川は今もながれたりおもへばこ  
こよ鮎とりしところ



わがためにかきておくれよ秋の野に萩さくところ  
鶉なくところ

大前おほまへにならす小鈴こすずの音ききてやしろの鼠ねひる  
も出できぬ

よき歌のいよいよ多くなるままにいよいよ君  
の痩せてゆくかな

おく山に角かどおほき巖いわを見いでけりわが名わが  
歌きざみておかむ

歌かきし筆をあらへば雲なして墨は流れぬ庭  
のやり水

みささぎの松のまづくにたちぬれしこの旅衣  
たたみてゆかむ



いつはりの人ほど歌はたくみなりうちうなづ  
くな姫百合の花

わが戀によく似たらずや萌えいでて山羊やぎにふ  
まれし野べの若草

賤の男が田をすきかへす鋤のさきにかすみて  
見ゆる小筑波せきの山

今日もまたうつくしき尼に逢ひにけり梅が香  
かをる岡崎の里

繪葉書にふたつかきたる折鶴のわが歌成れり  
誰におくらむ

母君のゆるしをうけておなじくはさらにおく  
れよ志ら玉椿



御供<sup>みま</sup>してゆくはよけれど忘れても師の影ふむ  
なおぼる夜の月（わが子の師と共に、杉田へ行くに）

この三とせやまとの國をさびしともわれは思  
ひきおもふ君ゆゑ（池邊義象君の歸朝せしに）

かへりには高輪すぎて良雄等の墓も訪ひこよ  
今朝の白雪（雪のあした、學弟どもの、目黒へ行くに）

夜車<sup>よぐるま</sup>に乗りあひし人は皆いねて大磯<sup>おほいそ</sup>小磯<sup>こいそ</sup>ひとり  
歌をおもふ

御手づから女神の賜ふ白薔薇をうけむとすれ  
ばわが夢さめぬ

渡りつと母の文には書かずおかむあやふかり  
しよ谷の藤橋



母のあるわが身わすれて危くも籠のわたりを  
わたりけるかな

母が縫ひし守袋まもりぶくろを身につけて子は出でゆきぬ  
遠き旅路に

根わけして萩ひとかぶをもてきたる友とかた  
りぬ雨の夕ぐれ

もろともに引きし小松をとりかへてゑみてわ  
かれぬ千代の古道よさみち

わらび折るとわが子二人をつれゆけば焼野の  
末に雉子なくなり

ところどころ文字ものこれり誰が墓の志るし  
の石ぞ小田の石橋（安房なる國分寺村にて）



むら雀むれるる小田の鳴子繩たれもゆききに  
引けよとぞおもふ (安房農會のために)

雨にぬれて石部の里にやどりしは三とせのあ  
とよあはれ菅笠

すててある草鞋わらじの上に霜見えて並木のあたり  
月かたぶきぬ

家にある身は寒からずいざぬぎてこの綿入わたいれを  
君におくらむ (さる貧生の旅だたむとする朝、衣をぬぎて、錢とす)

うちむれてすみれ摘みにと行く子らが被布ひふの  
ふさ吹く野べの春風

酔よひしれて足は十文字とじの舟子等がまいはひの  
裾に春の風ふく (安房にて)



賣家の札をかかげし門のうちにさきたる梅よ  
誰を待つらむ

ちらちらとさくら花ちるおぼる夜に女扇をわ  
れひろひたり

つながれてねぶらむとする牛の顔にをりをり  
さはる青柳の絲

さくらさく上野の山の道かへて今日は谷中の  
墓めぐりせむ

父はうせて子の代となりし春よりは小さくさ  
けり牡丹の花

血をはきてうせにし友のおくつきにあかき躑  
躑の花さきにけり



道のべに色よくさけるすみれ草明日は誰が子の  
手にか觸るらむ

遠からず花の使もありぬべし去年の瓢のちり  
やはらはむ

色もなき花もにほひて何となく旅おもほゆる  
きのふ今日かな

去年の春となりの翁にわれ聞きて接ぎし姫桃  
花さきにけり

江の島にひろひし貝をみやこなる子へおくら  
むか小包にして

膝の上にこよひも吾兒はねぶりたり貧しき親  
を親とたのみて



去年の春妹と縮わがねしわかれ路の一もと柳もえ  
いでにけり

手にもてる枝をば棄ててさらにまた椿折りた  
りこころ多き君

ともすれば君が歌のみうたひをるこの身を人  
のあやしと思はむ

三三三

とともとても成らぬ戀とは知れれども今ひと  
たびは文やりて見む

三三三

御墓へとゆきかふ道の一すぢはのこしてまげ  
れ野べの夏草

いづこまでおくるもおなじ君よはやかへりて  
ゆきね家遠くなりぬ



龜の背に歌かきつけてなき乳母のはなちし池  
よ深澤の池

梅たをるかかぬ君は年わかしききても見ばや  
戀ものがたり

道とへば蝶舞ふかたと教へけりあはれあの子  
よ歌ごころあり

佐保姫のかすみの衣きぬにつつまれてまだねぶり  
をり妹山脊山

年老いしひとりの母のあらざらばわれもゆか  
まし君がゆくところ（難波常雄の支那へゆくに）

淡路より須磨明石をばながめたる歌はまだな  
し行きてよめ君（内田林太郎の淡路の中學校へゆくに）



わが宿に御墓はちかしをりをりの花だにたえず  
捧げまつらむ (父君のおもひに籠れる藤井静子へ)

すてて來し石をふたたびおもひいでて一里も  
どりぬこゆるぎの里

子等はみな貝をひろふといでゆきて磯のはた  
ごや晝まづかなり

いづかたにはやく聞くらむほととぎす日ぐら  
しの里駒込の里

わが思おもひそれよりそれへうつりゆきてまだ寝ら  
れぬに夜はあけにけり

今いくとせ住めよと神のおほすらむねたみそ  
ねみの多きこの世に



梅の花三枝たをりて三枝めにえたるこの枝君  
におくらむ

父君の御獵みかりの供とものかへるさに雨にあひしとこ  
ろかのひとつ松 (國分寺より小金井に向ふ道にて)

あか星もかげやどすべくわが庭に細きながれ  
をせき入れて見む

かの人と加茂の川原に月見してひろひし石よ  
わが硯石

橋の上の乞食かたかにものをあたへたる女うつくし  
おぼろ夜の月

羽衣のうたひうたひて月の夜に行く人もあり  
三保の松原



馬よけて道のかたへにたちゐたる少女はもて  
り梅のひと枝

わが歌を雲雀につけてはなたばや戀しき君は  
今雲の上

さびしさに椿ひろひて投げやれば波輪なみをなせ  
り庭の池水

小簾すのうちに一ひらちりし花びらをとりて眺  
めてさて庭にすてぬ

朱硯に窓のわか葉の露うけてよべかきし文な  
ほしても見む

ほととぎす聞きに來ませと山里の友はおくり  
ぬうつ木ひと枝



おのづから鋏もつ手のふるひきて剪られずな  
りぬ白百合の花

縁にいでてちぎりし人を待ちをれば見なれし  
如き鳩の舞ひきぬ

われたまたま朝とくおきて見つるかな卯の花  
垣に月落つるころ

三三三

夕ぐれを何とはなしに野にいでて何とはなし  
に家にかへりぬ

三三三

手の書を地におとしてわかき子のねぶりてを  
るよ釣床の上

床の間の妹が小琴もおのづから聲たてつべき  
歌よみなばや



わが歌のつひの志らべやいかならむ問へどこ  
たへず峰の松風

船人も船よりいでて若水をけさは汲みけり室  
のとまりに

萩の枝にむすびて來つるわが歌は露にやぬれ  
し君が見ぬまに

芭蕉葉にから歌かきて筆おけばゆふべすずし  
く風ふきいでぬ

夢に見し女神のあとを志たひきて今朝われ見  
たり白百合の花

長良川雪のついでに冬ごもる鵜飼が宿もおと  
づれて見む (長良川にて)



うせし鶺の手むけの歌を乞ひきたる鶺飼の爺おぢ  
よ數珠もちてあり(同)

名も知らぬ茸たけのこをば食ひてねたる夜の夢やすか  
らず木曾の山里

いつまでも子供と乳母はおもふらし今年ことしの秋  
も栗とどけきぬ

きのふ夜よる狼人を食ひたりと賤はかたれり木曾  
の山みち

よる波をこはしといひしをさな子も貝ひろふ  
まで浦なれにけり(小田原にて)

たらちねの杖にと思ふ竹の上に多くは雪のつ  
もらざらなむ(明治三十四年新年御題雪中竹といふことを)



明治三十五年の秋ばかり、高田病院にて、病を養ひけるほど、人人におくれる歌どもの中より、

わが歌の見すべきものはあらねども松風きよし  
し笛もちて訪へ（岡田氏のもとへ）

このゆふべ友のおくれる繪はがきの萩見てを  
れば雁啼きてゆく（石森氏のもとへ）

とはいへどかくて死なるる身にもあらずはや  
うちやめね入相の鐘（雲烟師のもとへ）

わが植ゑてわが土かひてならせたる茄子（なすび）ちぎ  
らむ訪はせわが君（永島氏のもとへ）

なき友の柩まもりてきりぎりす聞きにし秋は  
まためぐりきぬ（なき友池田氏の母君へ）



わが墓を訪ひこむ人はたれだれと寝られぬま  
まに數へつるかな (金子薫園のもとへ)

ともかくもこの秋まではながらへて今一たび  
は萩の花見む (國分みさ子のもとへ)

ながらへて今年も秋にあへれどもそぞろに寒  
し萩の上の露 (またみさ子のもとへ)

三三〇

三三一

まだ咲かぬ小萩が枝をふきをりてうらみはな  
きか秋の夕風 (萩原いく子のうせぬと聞きてその母君へ)

ふもと路に待ちてをおはせわれもまた越ゆべ  
くなりぬ死出の山坂 (佐々木高美氏の百日祭の日その靈前へ)

萩それよ萩はわが身のいのちなりもとの心を  
いかで忘れむ (井上氏のもとへ)



病める身をわすれて君と月見むはこよひの外  
に今いくたびぞ (江見氏のもとへ)

舟うけてをりをり君の訪ひまさば住みても見  
ましかのはなれ嶋 (藤井静子のもとへ)

昨日より今日は悲しく聞えけり明日またいか  
に入相の鐘 (久保猪之吉のもとへ)

罪といふ罪犯さじとおもふ身にもし罪あらば  
神ゆるしませ (毛呂清春のもとへ)

\*

おなじ世にたまたま君と生れながらわかれて  
ものを何おもふらむ

何となくわが鑿の手のふるひきてきざみかね  
たり人のおもかげ



一つだにすくひあげよと三つまでも水に流し  
ぬまら菊の花

御手にふれし梅と思へばこぼれたる蕾ひとつ  
も棄てがたきかな

君が家のはひりに残る乳母車今より誰をのせ  
むとすらむ(なまなき見うしなひたる某氏に)

釣やめてこのまま舟に寝てゆかむ夕かせすず  
し岸の蘆原

舟よする夕川岸の葦の上にかすかに見ゆるを  
つくばの山

荷の下またに啼くこほろぎのこゑすなり夜やふけ  
ぬらし淀の川舟



姫君が戀まりそめてこもらする閨のすだれに  
秋の風ふく

夕月はやくやどりぬ打水のなごりとめたる  
葉蘭はらんの露に

むらさきの袴つけたるをとめ子が一枝ひとえをりゆ  
く野べの白萩

波の上にただよふ人のなきがらをめぐりめぐ  
りて鷗飛ぶなり

落したる人は誰が子か色あかき櫛こそ見ゆれ  
わか草の上に

むかしわが接つぎし海棠きて見れば片枝に木瓜ぼけ  
の花さきにけり



山寺の鐘のひびきにねざめして西へかたぶく  
月を見るかな

歌らしき歌をもきかでいたづらに枯れてもゆ  
くか唐崎の松 (近江にて)

さらさらと清水ながるる巖かげに小鳥きて浴  
む日は午うまにして

落栗におどろかさされてかま蟪蛄かきりのいかりしさまも  
おもしろきかな

今日ひと一日ひうき世わすれて君と共にながめたり  
けり峰の白雲

羽織にとわがおくりやる白き絹いかなる色に  
染めて著るらむ



ゆゑありて撞かずなりにし山寺の釣鐘さむし  
木がらしの風

泣きまどふ親のこころも知らぬ見れば子はも  
たざらむ禍津日の神

君はいま袈かほしめきて驢馬にのり廬山のあたり雪や  
見るらむ

うせし子に面影似たる雛もあり買ひてゆかま  
し妹に見すべく

舟よばふ渡わたしはいまだくられけどあらはれそめ  
ぬ多摩の横山

をさな子に矢をひろはせて春の日を弓にくら  
せり花の下かけ



まよひ來し螢とがむな罪をいはば罪はこなた  
よともし火のかげ

もろともに月は見たれどその名をば問はてや  
みにき磯の松原

吾妹子が挿しし小瓶をの卯の花に水やりをれば  
ほととぎす啼く

君が名を軒の鸚鵡にをしへけりひとりさびし  
き五月雨のころ

家づとに買ひたる海苔もまめるまで雨ふりい  
でぬ大森の里

かの鐘の音のなくばとおもひけり紅梅町のお  
ぼろ夜の月

(駿河臺なる高田病院に療養しけるほど)



みなしご我<sup>われ</sup>せめてここらに宿とりて眺めてゆ  
かむ父島母島

八千草の花より外に戀知らぬ野守が庵にひと  
夜やどらむ

蜂の巢のからにも心おかれけり荒れたる寺の  
軒よ垂<sup>たる</sup>木よ

朝風に裏<sup>うら</sup>白<sup>しろ</sup>の葉のうらを見て心のまよひすく  
なくなりぬ

うつしなば雲雀の影もうつるべし寫<sup>しや</sup>真<sup>しん</sup>日<sup>び</sup>和<sup>や</sup>の  
うららけき空

こころみに石をひろひて投げて見むねぶるが  
如し春の川水



わか草に鏡をすてて胡蝶おふ狂女きやうにょ髪ながし野  
べの春かぜ

さわさわとよせくる磯の秋の潮に足をひたし  
て歌をこそおもへ

梅かをる門まで君をおくり出でて去ばし眺め  
ぬおほる夜の月

小ちさき墓に乳ちを去ほりて手むけたる人影ひとかげさむ  
し冬の夜の月

さきそめしあやめをめせとぬれながら花賣翁  
雨にとひきぬ

むらさきか白かはいまだわかねども一もとふ  
えぬ庭の萩原



君が詩に似たりといはずいはねども野生のの桔ぎ  
梗きやうおもむきはあり

ここに三とせ羊をおひてくらせりといふ人い  
まだものおもひあり

蟲きくと秋の嵯峨野にいでしとき掘りておく  
りね小萩ひとかぶ

柳三もといたく年へて見ゆれども名はあらは  
れず里の板橋

目志いひたる妹いもうとよびて今日もまた母のうつしゑ  
手にさぐらせぬ

歌に瘦せしわがこの頬ほほを玉つしま神のかがみ  
にうつしてや見む



まだくらしき鎮守の森の霧の中にきえのこりた  
るともし火の影

病める身の縁までいでて蜘蛛の巣にかかりし  
蝶を放ちてやりぬ

ありあけの月かげ淡あはきやせ村に家ところどこ  
ろ庭鳥のこゑ

筆とりてわが入る紀路きろのをちかたに霞める山  
は何といふ山

人の世にのぞみたちたるよわき身のめづべき  
花か露草の花

湖みづうみのかなたの寺の鐘の音の今日もきこえて今  
日もまた暮れぬ



ひきあぐるよつて四手の網に蝦たがはねて秋風さむし磯  
の夕ぐれ

手ににぎるこ小筆の柄つのつめたさもおほゆるま  
でに秋たけにけり

めづらしき浮うき木ぎひろひぬ御佛をきざみすゑば  
やこの濱寺に

歌かきてやりし菅笠かたぶけて雨に越ゆらむ  
小夜の中山

かへりゆくやもめがらすを見おくりて尼君た  
てり長谷の山道

萩さける堤にわれをのこしおきて水はひがし  
へ人は南へ



踏切に旗をばふりて世を志のぶ人まだわかし  
妻戀の里

二日三日家にこもりてなき友の石ぶみかきぬ  
花のこのごろ

筆草の根をばたばねて砂の上に歌かきて見つ  
磯の夕ぐれ

やりすてし歌のふる反古雨に朽ちて聞くべく  
なりぬこほろぎのころ

この宿は寝ながら富士も見えにけり死なばこ  
こにて死なむとぞ思ふ

秋風にふかれてたてるやせ馬に折り來し薊あ  
たへてゆかむ



來む秋はたのまれぬ身ぞ去ばしだに影をば見  
せよ望の夜の月

秋風にふかれふかれて折れながら穂にいてし  
薄われによく似たり

磯づたひ行きてかへらむ江の島へ一里はちか  
しおぼる夜の月

あたたかき母のなさをおもひいでて寒き日  
さむき國へたつらむ

父君の繪筆をかりてあかく白く塗らしし獨樂  
はそのままにあり（梶田半古氏の愛子を失へるに）

消えかねてまだのこれれど小さき小さき沓の  
あとなかず庭の志ら雪（同）



やせはてし脛はざの血吸ひて飛びゆきし蚊の影さ  
びし秋のはつ風（病床にて）

潮浴ちむとおりたつ神の白き手にふれむそれま  
では汝なが名なのりそ（雜誌「なのりそ」のはじめに）

何となくつめたき石に手をふれて悟るといふ  
もまよひなるらむ

かへるまで死ぬなといひしその人もたけき身  
ならず神まもりませ（陸實氏の清國に行くを送りて）

病みつつも三年は待たむかへり来てわが死な  
む時脈みきとらせ君（久保猪之吉の獨逸へ行くわかれに）

をとめらの麥つき唄にねざめして夕顔棚の月  
を見しかな



おなじ世にたまたま君と生れきてともに歌よ  
みともに萩見る

木枯よなれがゆくへのまづけさのおもかげゆ  
めみいざこの夜ねむ（病おもくなりて）

# 萩之家歌集

完



ここに、亡父直文の歌を、ひと巻に編みて、萩之家歌集と名づ  
けつ。父は、世にありし間、興にふれて、詠みすつるを常とし、別に、  
みづから選びおけるものもなかりき。されば、おほかた、そのか  
みの新聞雑誌に出でたるを蒐め、また、交友及び、門弟諸氏が所  
藏の遺墨を寫し、更に、萩之家漫筆に散見する、晩年の作を合せ  
て、やうやうに、このひと巻を成せり。なほ、世にちりほひて、これ  
に漏れたる歌は、得るに隨ひて、改版の際に加へむ。

歌の次第は、父が、二十歳の秋、伊勢より東京に上れる紀行、村  
雨日記の歌より起し、以下大略、年代を逐うて、編纂したり。或は、  
以て、作風の變遷を觀るに便ならむ。

卷初に掲げたる父の肖像は、明治三十一年の寫真なり。また、



筆蹟の中、青戸氏に贈れるは、明治十三年の筆にして、當時父の名は、盛光と稱したりき。馬上杜鵑は、同二十四年の筆。舟うけて、及び海上遠山は、共に、晩年の筆。草稿は、萩之家漫筆の一部を撮影せるものなり。

本集の編纂及び校正には、父の門弟諸氏の助力多く、また、装幀畫は、畫伯長原止水氏執筆せられたり。ここに、諸氏の高誼を謝す。

明治三十九年四月

落合直幸



萩之家著書目錄

日本大文典 全壹册 明治書院發行

大鏡詳解 全壹册

訂正中等國語讀本 全拾壹册

中等國語讀本 全拾册

中等國文讀本 全拾册

國文學史教科書 全壹册

新編假名遣 全壹册

高嶺の雪 全壹册

萩之家遺稿 全壹册

萩之家歌集 全壹册

日本文學全書 全廿四編 博文館發行

家庭教育歴史讀本 全四册

新撰日本外史 全壹册

新撰歌典 全壹册

國文評釋 全壹册

中等教育日本文典 全壹册

中等教育國文軌範 全壹册

大倉書店發行

日本大辭典ことばの泉 全壹册

國書辭典 全壹册

女子消息雁のゆきかひ 全貳册

女子雅文教範 全貳册



明治三十九年四月廿五日印刷  
明治三十九年六月一日發行

明治書院創業  
十年記念刊行

不許複製

著者 故落合直文

相續者 落合直幸

東京市本郷區駒込邊葛町七十八番地

發行者 三樹 一平

東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所 東京市神田區錦町一丁目十番地 明治書院

特電話本局二四三八番



# 明治書院出版目錄

## 參考書

落合直文先生著

大鏡詳解

全一冊

定價金一圓六拾錢  
郵稅金拾五錢

和藤英球先生著

增鏡詳解

全一冊

定價金一圓七十五錢  
郵稅金拾五錢

松本愛重先生閱  
江見清風先生著

水鏡詳解

全一冊

定價金一圓二拾錢  
郵稅金拾錢

和藤英球先生著

榮華物語詳解

全十五冊

定價一圓八拾各四  
拾錢九ヨリ以上各四  
拾五錢郵稅各金六錢

和田英松先生著

官職要解

全一冊

定價金拾一錢  
郵稅金拾錢



石萩野由之先生 石橋尚實先生著	十訓抄詳解	全一冊	定價金拾二錢圓
關根正直先生著	訂改 更科日記略解	全一冊	定價金三拾五錢
佐々政一先生著	うづら衣評釋	全一冊	定價金三拾錢
佐々政一先生著	近松評釋 天の網島	全一冊	定價金三拾六錢
鳥野幸次先生著	東關紀行詳解	全一冊	定價金三拾五錢
金子元臣先生著 花岡安見先生著	古今 歌文書綱要	全一冊	定價金五拾六錢
和田英松先生著	建武年中行事註解 附錄 增註日中行事略解	全二冊	定價金八拾五錢

松井簡治先生著	庭訓往來諸抄大成	全一冊	定價金四拾錢
花岡安見先生著	國語學研究史	全一冊	定價金三拾錢
小中村清矩先生著	歌舞音樂略史	全二冊	定價金八錢圓
落合直文先生著	日本大文典	全一冊	定價金壹圓七拾五錢
今泉定介先生著	保元平治物語解釋	全一冊	定價金拾四錢
金子元臣先生著	徒然草讀本解釋	全一冊	定價金拾五錢
落合直文先生著	新編 假名遣	全一冊	定價金三拾錢



國文學雜誌社編 國漢教員試驗問題集 全一冊 定價金貳拾錢

落合直文先生校 土佐日記讀本 全一冊 附錄註釋 定價金拾四錢

落合直文先生校 十六夜日記讀本 全一冊 附錄註釋 定價金拾四錢

落合直文先生校 方丈記讀本 全一冊 附錄註釋 定價金拾三錢

落合直文先生校 竹取物語讀本 全一冊 附錄註釋 定價金拾五錢

落合直文先生著 萩之家遺稿 全一冊 定價金一圓二拾錢 郵稅金拾錢

金子元臣先生著 古今和歌集評釋 全五冊 定價卷一各金四拾錢、卷二各金四拾錢、卷三各金四拾錢、卷四各金六錢

鹽井正男先生著 新古今和歌集詳解 全六冊 定價一卷金三拾五錢、二卷以上各四拾五錢、郵稅各金六錢

武島又次郎先生著 新撰詠歌法 全一冊 定價金四拾錢 郵稅金六錢

武島又次郎先生著 國歌評釋 全三冊 定價各金四拾錢 郵稅各金六錢

金子元臣先生著 柴山啓一先生著 百人一首評釋 全一冊 定價金二拾五錢 郵稅金四錢

服部躬治先生著 戀愛詩評釋 全一冊 定價金三拾五錢 郵稅金四錢

小杉樞郎先生著 神谷保朗先生著 旋頭歌評釋 全一冊 定價金三拾五錢 郵稅金四錢



國詩會編

國詩 全六冊

春秋冬戀雜の卷各金  
拾五錢、夏の卷拾貳  
錢、各金貳錢

與謝野寬先生著

東西南北 全一冊

郵稅價金二拾錢

與謝野寬先生著

天地玄黃 全一冊

郵稅價金二拾錢

金子元臣先生著

歌がたり 全一冊

郵稅價金三拾五錢

尾上八郎先生著

梨壺の五歌仙 全一冊

郵稅價金三拾錢

落合直文先生  
藤井靜子先生編

萩の下露 全一冊

郵稅價金二拾二錢

國分高胤先生著

詩董狐 全一冊

郵稅價金二拾錢

宮崎宣政先生著

晴瀾焚詩 全一冊

附錄 李自傳  
郵稅價金三拾錢

金子元臣先生撰

新撰 柿本人麿歌集 全一冊

郵稅價金二拾五錢

落合直文先生  
森下松衛先生著

中等作文辭典 全一冊

郵稅價金六拾五錢

桂 湖邨先生著

漢籍解題 全一冊

郵稅價金三拾錢

簡野道明先生監修  
國語漢文研究会編

讀書作文用字訣 全一冊

郵稅價金二拾八錢



橫井時冬先生著	芸窓襍載	全一冊	定價金一圓二拾錢
池邊義象先生著	佛國風俗問答	全一冊	定價金五拾五錢
橋詰孝一郎先生著	中學書翰文範	全一冊	定價金拾八錢
落合直文先生著	高嶺の雪	全一冊	定價金二拾五錢
沼田頼輔先生著	日本農業小史	全一冊	定價金七拾六錢
吉丸一昌先生著	中學作文範	全一冊	定價金三拾三錢
明治書院編輯部編	文法正誤法	全一冊	定價金三拾四錢

櫻井一義先生著	太田道灌	全一冊	定價金二拾五錢
新見吉次先生譯 柴山鷲雄先生	社會學と政治	全一冊	定價金五拾六錢
中川謙二郎先生閱 鈴木定一先生著	日本の實業補習教育	全一冊	定價金五拾六錢
伊藤松雄先生著	清國時文類纂譯笈	全一冊	定價金拾八錢
沼田頼輔先生著	中學東洋史要參考書	全一冊	定價金三拾四錢
堀江秀雄先生著	活少年	全一冊	定價金貳拾四錢
堀江秀雄先生著	理想の少女	全一冊	定價金貳拾四錢



新聲社編纂 若葉集 全一冊 定價金拾五錢 郵稅金四錢

大久保初男先生著 日本中文典 全二冊 定價金六拾錢 郵稅金六拾錢

國文學雜誌社編輯 國文學 每月一回 發行 定價一冊六錢郵稅五厘一ヶ年分金七拾錢

大日本女子教育會編輯 女子教育 每月一回 發行 定價一冊拾錢郵稅一錢一ヶ年分一圓廿錢

國語漢文研究會編 故事成語辭典 全一冊 印刷中

教科書

落合直文先生編 訂再 中等國語讀本 全十冊 定價金二圓五拾錢 郵稅金二拾錢

落合直文先生編 訂正 中等國語讀本 全十一冊 定價金二圓九拾錢 郵稅金三拾錢

落合直文先生編 中等國語讀本 全十冊 定價金二圓三拾錢 郵稅金二拾錢

落合直文先生編 中等國文讀本 全十冊 定價金二圓拾二錢 郵稅金二拾錢

明治書院編輯部編 中學讀本 (國語漢文合編) 全十冊 定價金三圓三拾錢 郵稅金三拾錢

明治書院編輯部編 補習科用 中等國語讀本 全二冊 定價各卷金二拾七錢 郵稅各卷金四錢



佐藤仁之助先生編 堀江秀雄先生編 新體 補習國語讀本 全一冊 定價金四拾錢

明治書院編輯部編 新編 補習國語讀本 全一冊 定價金廿四錢

佐藤球先生校訂 明治書院編輯部編 訂改 高等女子讀本 全十冊 定價各卷金廿三錢

明治書院編輯部編 高等女子讀本 全八冊 定價金二圓二拾八錢

明治書院編輯部編 補習科用 高等女子讀本 全二冊 定價各卷金三拾錢

明治書院編輯部編 師範學校 國語教科書 全五冊 定價各卷金三拾錢

江見清風先生編 齋藤惇先生編 講習科用 國語讀本 全三冊 定價各卷金二拾三錢

和田英松先生校訂 佐藤球先生校訂 增鏡讀本 全二冊 定價各卷金廿五錢

落合直文先生校訂 池邊義象先生校訂 大鏡讀本 全二冊 定價上卷廿五錢下卷三拾五錢郵稅各六錢

今泉定介先生撰 保元物語讀本 全一冊 定價金拾五錢

今泉定介先生撰 平治物語讀本 全一冊 定價金拾四錢

今泉定介先生撰 太平記讀本 全一冊 定價金三拾錢

今泉定介先生撰 平家物語讀本 全一冊 定價金二拾五錢

島山健先生編 金子元臣先生編 神皇正統記讀本 全一冊 定價金三拾錢



關根正直先生閱

徒然草讀本

全一冊

定價金拾八錢

池邊義象先生閱

今昔物語讀本

全一冊

定價金二拾五錢

石川岩吉先生編

十訓著聞讀本

全一冊

定價金二拾五錢

內海弘藏先生著

訂正 日本實業讀本

全三冊

定價各卷金四拾錢

久松義典先生著

實業補習讀本

全三冊

定價各卷金二拾五錢

落合直文先生著

國文學史教科書

全一冊

定價金五拾錢

落合直文先生閱

中等教科 日本文學史

全一冊

定價金六拾五錢

橫地清次郎先生著

國文法教科書

全三冊

定價金七拾錢

內海弘藏先生著

中等 文法作文教科書

全三冊

定價金一圓六拾五錢

明治書院編輯部編

女子日本文典

全三冊

定價金七拾九錢

大林德太郎先生著

中學日本文典

全三冊

定價金五拾錢

三矢重松先生著

普通文法教科書

全三冊

定價金六拾九錢

屋代熊太郎先生著

近世國語文典

全一冊

定價金二拾五錢



明治書院編輯部編

假名遣教科書

全一冊

定價金拾三錢  
郵稅金四錢

堀江秀雄先生著

正訂

中學作文教科書

全五冊

定價金一圓拾錢  
郵稅金拾五錢

松平靜先生著

女子作文教科書

全四冊

定價金一圓拾三錢  
郵稅金拾五錢

岡田起作先生著

中等習字教科書

全三冊

定價各冊金廿四錢  
郵稅各冊金四錢

大口綱二先生著

高等

女子習字教科書

全四冊

定價各冊金廿四錢  
郵稅各冊金四錢

簡野道明先生校訂  
國語漢文研究會編

新編漢文教科書

全五冊

定價金一圓卅九錢  
郵稅金拾五錢

國語漢文研究會編

中等漢文教科書

全五冊

定價金一圓五拾錢  
郵稅金拾五錢

國語漢文研究會編

中等漢文讀本

全十冊

定價金二圓四拾錢  
郵稅金拾五錢

中島幹事先生編  
村山自彊先生編

漢文讀本史記列傳抄

全四冊

定價金九拾錢  
郵稅金九拾錢

國語漢文研究會編

補習漢文教科書

全一冊

定價金三拾五錢  
郵稅金四錢

簡野道明先生校訂  
國語漢文研究會編

師範學校漢文教科書

全四冊

定價金一圓拾錢  
郵稅金拾五錢

簡野道明先生編

女子漢文教科書

全四冊

定價金一圓二錢  
郵稅金拾錢



伊藤松雄先生編

清國時文類纂

全一冊

定價金廿四錢

簡野道明先生校訂  
國語漢文研究會編

支那今體文讀本

全一冊

定價金四拾錢



野村浩一先生著

國史綱要

全一冊

定價金八拾錢

橫井時冬先生著

中等國史撮

全一冊

定價金六拾錢

沼田賴輔先生著

訂正中等日本歷史

全二冊

定價金八拾錢

山崎庚午太郎先生著  
大林德太郎先生著

中等日本史要

全一冊

定價金七拾錢

今泉定介先生閱  
鳥野幸次先生著

訂正中學國史

全二冊

定價金五拾錢

沼田賴輔先生著

中學東洋史要

全一冊

定價金七拾五錢

小島政吉先生著

子女日本歷史教科書

全二冊

定價金九拾五錢

小島政吉先生著

子女東洋歷史教科書

全一冊

定價金五拾錢

小島政吉先生著

子女西洋歷史教科書

全一冊

定價金三拾五錢

小島政直先生編

子女西洋歷史教科書附圖

全一冊

定價金三拾錢

北村包直先生著

簡易外國歷史教科書

全一冊

定價金五拾錢



土屋彦太郎先生著  
相川茂郷先生著

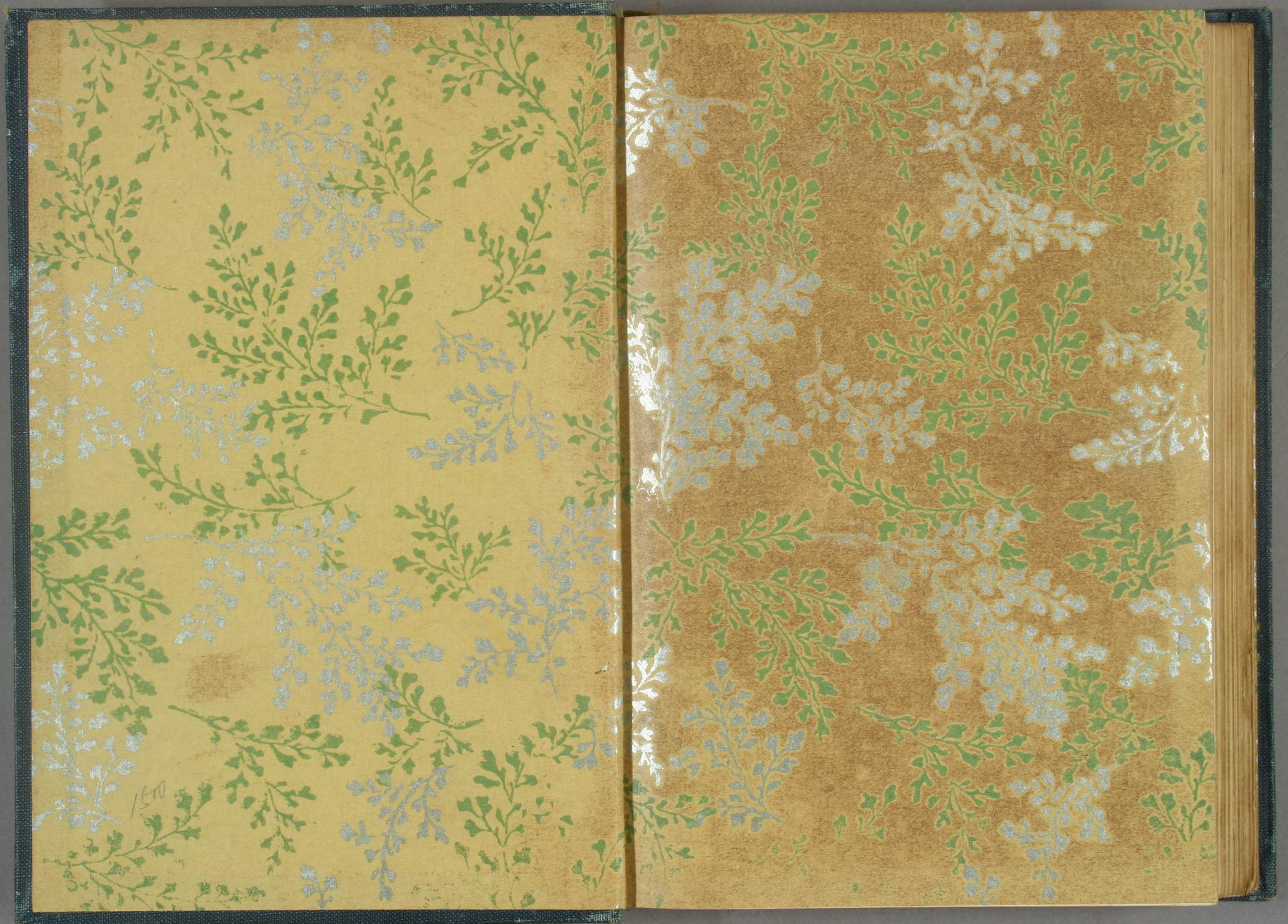
中等

法制經濟教科書

全一冊

定價金六拾錢  
郵税金六拾錢





150